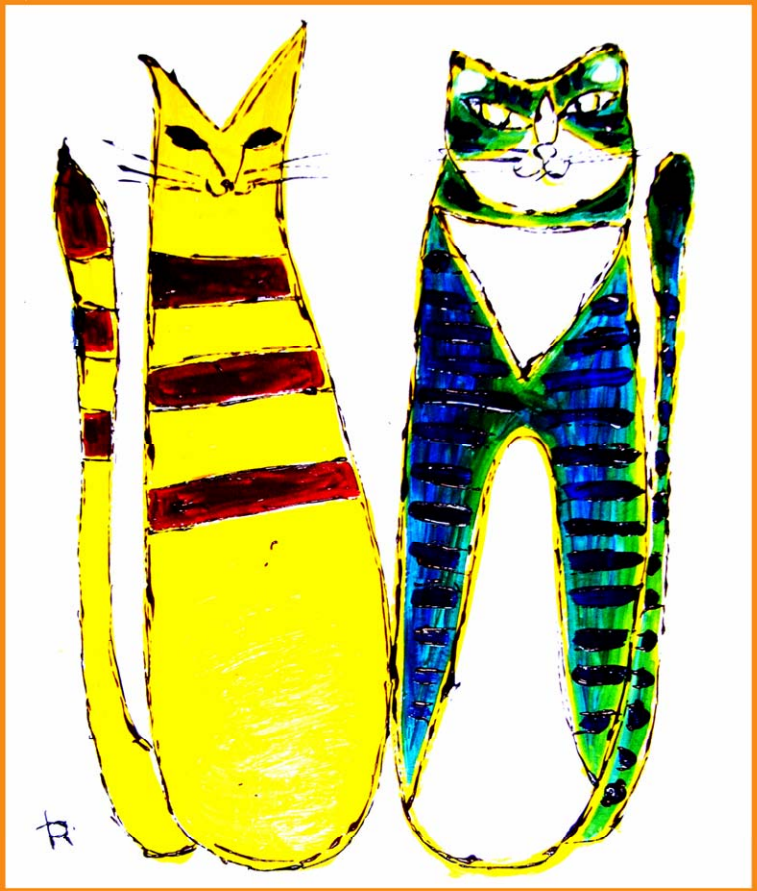
続・自分で出版する本

http://www.ojara.net



おじゃら りか 編・著
あとりえ おじゃらの本

++++++++++++++++++++++++++++

第二部

++++++++++++++++++++++++++++

自分で出版する本
データ盗難とその対策、
作家はどう考えて文を書いてゆけばよいのか？

二〇〇三年八月作成
二〇〇五年七月改訂
二〇〇八年六月タイトル改定

＊＊＊　この文を公開するに当たって　＊＊＊

実は、この文は、データ盗難に遭って、イロイロと調査を進めている、怒りの絶頂時に書いた文で、二年もの間、公開しないでいた続編なのです。

読み直せば、怒りに任せて書いた文は、校正している自分が情けなくなり、ずっと、公開しないつもりでした。こんな文を発表するのは、作家の恥だということを知っていたからです。

これを書いた当時は、まだ本で金を稼ごうという野心があり、ＣＤだけで配布に限定しようとか、前編とのセット販売にしようとか、画像加工の方法をプラスして、買いたい人の層を広げようとか、次なる構想は練ってもいたんです。

その後、自分の本を使ってテストを繰り返した結果、何をしても盗難は防げないということが解り、電子本は、全てを無料公開にシフトしてゆく決断をしたため、盗難のゴタゴタを、公開する必要が無くなったこともありました。

二年も前に作った前編（この本の第一部）は、無料配布にふみきった途端、一年近くで三千三百人の方にダウンロードしていただきました。

ＰＤＦファイルの普及が進み、昨今では、会社で毎日ＰＤＦ文書を使っている人も大量にいると聞きました。今更、ワードのＰＤＦ化を、本で取り上げる必要もないということです。その程度の内容の本では、たいした反響にもならないというのはわかりきっています。

出版社さんとも相談し、今は当たり前になってしまった話より、これから本を自前出版しようとする人は、自分で本を出版すると、どんなことが待っているのか、それをどう考え、どう乗り越えれば良いのかということに、より価値があるんじゃないかと、この続編も加えようということに決まりました。（これを改定しているときには、オンデマンド出版をするという予定だったので、出版社さんと相談したのです。）

私がどんなセキュリティーをかけ、どんな風に盗難に遭い、セキュリティーを強化した結果どうだったのか？

本の流通ルートに乗せることを目指して、本の種類を増やしていったけれども、どういう結論に至ったのか？

第二部では、そういう話を中心に、私が電子本作成をどう進めて、どう方向を転換していったのかというお話をしようと思います。

読み苦しい点もあるとは思いますが、これから本を出したい皆様のご参考になれば幸いです。

＊＊＊　はじめに　＊＊＊

いやー、やられましたよぉ。
まさか、アタシ程度の本でも、データ盗む人がいるなんてねえ。
インターネットって、フツーの感覚なんでしょうかねえ。

まあいいや。
アタシの方も、電子本の発売当初はバリ島にいて、あまり面倒みられなかったこともありましたしね、今までは、今まで、これからはこれからってことで、気分を切り替えて、またボチボチと、考えようと思います。

アタシの場合はね、本を通して、アタシの絵とか見ていただければ、出版の目的は達成しているよーなもんなんです。

そういう意味ではね、実際、本の売り上げなんて、微々たるものですしね、ガタガタと騒ぎ立てる程、盗まれたというワケでもないんです。
でも、盗まれた本の総額は、笑える額じゃなかったっす。

知りたいでしょう。何人の方が、どういうふうに、データーを盗んでゆくのか。

そして、その対策をどう考えたのか。

うふふふ。そんなこんなでね、書くことにしましたよ。懲りもせず。

絵を描く人や写真が趣味の人は、自分の作品集を作りたいし、手芸が趣味の人は、作り方の本を出したいし、俳句や詩が趣味の人は、自分の本を出したいんです。

ニーズはあるのに、画像入りの本は、制作費が高すぎるという一点で、ずっと本を出せずにいる人が沢山いるのです。

アタシはね、そういう方が、電子本という形で、ご自分の本を出版するという夢が実現するといいなと、真に願っています。

そういう純粋な気持ちで、この本を書いたのです。

ホームページで作品を発表している？

ダメダメ。ホームページなんて、本とは認められないのです。頑張ってホームページを作れるようになった方なら、電子本は必ず作れます。

図書コード取って、表紙をつけて、自分の作品集という形にまとめておく。この作業に価値があるのです。（現在ＷＥＢページは本として認められていないので。）

まあ、電子本のデータが、一部の方に盗まれてしまったことは仕方ないですけどね。アタシは、今後、ネット配信を継続するのかということに関しても、じっくりと考えました。

アタシは、いい人ですけど、バカじゃないんです。どうすることが、『本当に電子本を作りたい人』に、一番いいのか。結論を出すのに、三ヶ月もかかっちゃいました。

本として出版したんですから、作者だって、多くの人に読んでもらいたいんです。でも、現在は、価値がある情報ですから、有料で配布したいんです。

アタシはね、自力で電子本が作れるようになったし、自力で図書コードも取りました。

多くの本を出版したい人が、自分で本を出せる日が来たということを、多くの方に知って欲しいと思っています。

折角、そんな時代がきたのだから、多くの方の夢が叶うといいなという一点で、この本を書いたんです。

アタシはね、諦めないっす。

夢を持った人が、夢を実現できる。その為に書いた本なのであれば、データ盗まれた程度で辞めるべきじゃないでしょう。

だいたい、盗んだデータで、本を書いてもさあ、そんな心がけの悪い人の本なんて、どうせ売れないっすよ。つまらないに決まっています。

文芸というのは、人の心に触れるものでね、人の心を動かさなけりゃ、読まれないんです。

人の心を動かすというのはね、誰にでもできることじゃありません。

心がけ良くし、日々精進し、人には親切にし、自分のために何かをしてくれた方には、感謝しなければなりません。

説教臭いですか？

アタシはね、芸術家なんでね、自分が、いい人間になって、いい気を発するようにならないと、いい作品が作れないと信じているんです。

心が乱れると、絵も乱れてしまいますからね。

ですからね、不正アクセスされて、データが盗まれたときには、ブチ切れて、もう、本を書くのもよそうかと思ったんですけどね。

本を買ってくださった方も沢山いらっしゃるし、書く能力もあるのだから、書かなければなりません。書けるうちは、文も書き続けようと、アタシは考えています。

続編配布のため、カンタンにはデータを盗めないような仕組み作りもしなければならず、以前よりも、サイト設計に力を入れてもみました。

これから本を出したいアナタなら、知りたいでしょう。

アタシが、どうやって、これらの問題を検討し、どう対応したのかを。

自分の本を、どうやって世に出そうかと考えたときに、もし、その作品が優れているのなら、誰でもがぶち当たる問題だからです。

アタシはね、無料の本も配布しています。

ついでにね、無料にすると、どうなるのかも、追加しておきますからね。今後のご参考にしていただければと思います。

自分の本、出版できるといいですね。

自分が主張(発表)したいことがあるのですから、折角、書く能力もあるのですから、本にしてあげましょう。

自分の本が完成した喜びは、本を出版した人にしか解らないことを、アタシ知っています。

でもね、最終的に、売れるか売れないかは、文の内容によるのです。

『タダなら読んでみたい』本から、『金払っても読みたい本』にならなくてはいけません。これは、作家側の課題です。

もし、売れないのに、読まれているのだとすれば、それは、金にならない本しか書けない、アナタにも問題があるのです。

本には別な側面もあります、ホントウに優れた本は、まわし読みされてしまうのです。アタシだって、エースを狙えも、ドカベンも、ベルサイユのバラも、ガラスの仮面も、全刊人が買った本をタダで読ませて頂きました。

買った人が、友達に自分の本を貸すのは普通の行為です。

内容が優れていたら誰だって読みたいのです。

そんな本が書けたアナタは、自分を褒めてあげましょう。

だからといって、作家業で食えるかどうかとは違う話だということです。

厳しかったですか?作家で生きるということは、そういうことなのです。

今、アナタが目指すべきは、「人から読まれる文を書ける能力」を身に着けることです。

次に身につけるべきは、「書き続ける」能力です。

買ってもらえる本になるには、まだまだ時間がかかるということです。

「ああ、新刊出たから買いに行こう」という本を書けなければ、作家として生計を立てることは出来ないという現実を知れということです。

でもね、いい文はきっと読まれます。頑張って。

＊＊＊＊　もくじ　＊＊＊＊

この文を公開するに当たって
はじめに

第一章　盗難の実態と、その対策
全体の流れ
●『電子本、自前出版してみませんか？』発売
●どうやって、不正アクセスが発覚したのか？
●どのように本を配信していたのか？
●緊急措置と新しい対策
●どう考えたのか？
●ＣＤ版での出版に限定？

第二章　有料か無料か？

有料か無料か？
●無料の本へのアクセスって、何件あるの？

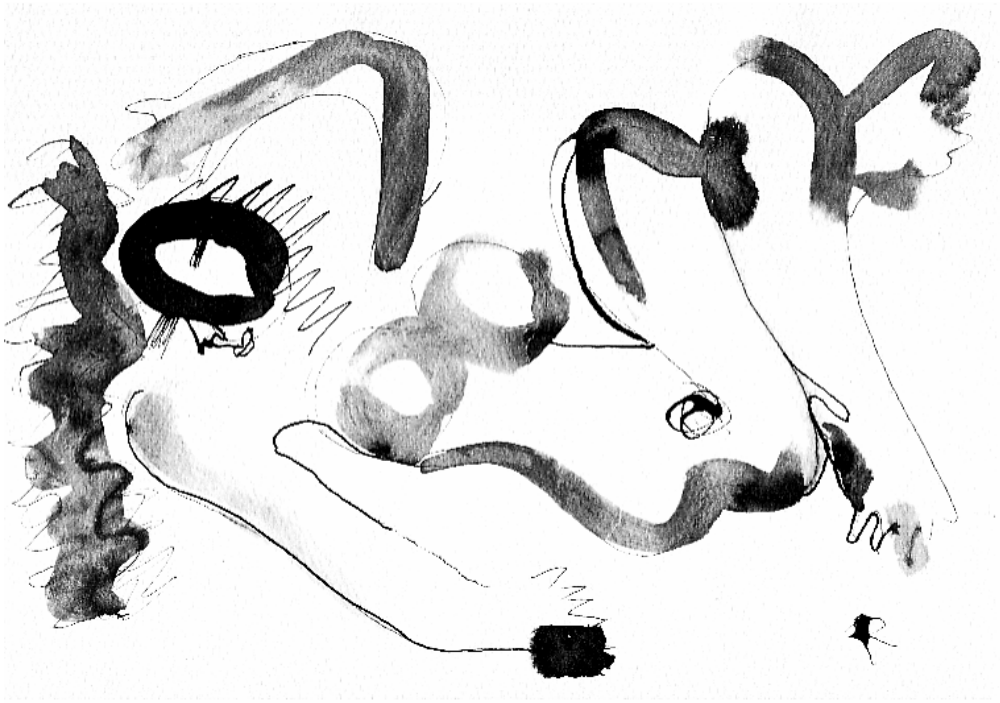
第三章　　画集を作る際の、画像データの扱い

画集を作る際の、画像データの扱い
画像データについて、どう考えるのが正しいのか
デジタルデータと、自分の作品の品質との折り合い
買った人がプリントできる画集

第四章　本屋さんで扱ってもらうには？
本屋さんに本を置きたい
決断
第五章　新しいISBNの話
第六章　オンデマンド出版の問題点
おわりに

第一章

盗難の実態と、その対策



＊＊＊　全体の流れ　＊＊＊

『電子本、自前出版してみませんか？』の出版・発売
←
どうやって、不正アクセス（盗難）が発覚したのか？
←
どのように本を配信していたのか？
←
緊急措置と新たなる対策
←
更なるデータ盗難
←
どう考えたのか？
←
ＣＤ版での出版に限定？

まず、ここまでが、データ盗難から、現在に至るまでの、事実の流れです。この順番で、どのように問題に対応していったのかを、ご説明していこうと思います。

●『電子本、自前出版してみませんか?』発売

『自前出版』発売が二〇〇三年四月の十日でしたが、実際本が売れたのは、それより少し後(確か一五日頃)で、アタシは、慌てて本をサーバーにアップロードしました。

この頃、私はまだバリ島在住だったため、ネット環境が劣悪で、自分のアップした本などであっても、稼動確認ができないことなどもあったのです。

正確には、昔書いた本も、一度サーバーに送ったら、そのままの状態で置きっぱなしという形を取っていました。

本のファイルサイズが大きいこともあり、(一冊当たり十メガ、データ転送には一時間程度要するため)、本の内容も、バリ島に特化されていたこともあり、わざわざ、データを盗んでまで読む人がいると思っていなかったこともあります。

「思えば、今までの本だって、データを盗まれていたのかもしれない。」

今更昔の話など、考えても仕方がありません。アタシは、アクセスログを頻繁にチェックなどしてこなかったのです。

理由は、別に、誰が来ても構わないし、ログを見たからといって、来て欲しくない人のアクセス拒否をする気もないからです。

見るのは決まって、一ヶ月に一度、月末にログを保存するときと決めていました。

『自前出版』をお買い上げの方には、本の他に、３つのおまけをつけていました。

一つは、ワードで本を作るときの元となる、ワードの基本フォーマット。

もう一つは、アタシには、俳句のお友達が多いので、『俳句集の作り方』の付録本。そして、俳句用のワードフォーマット。

本をお買い上げ下さった方は、ダウンロードのページにアクセスしていただき、それぞれ（必要な付録）をダウンロードしていただくような構造です。

●どうやって、不正アクセスが発覚したのか？

アタシは、本の稼動は確認したのですが、付録の一つ（俳句集の作り方）が、正常にアップロードされていないことに気づかずにいました。

月末に、お買い上げになったお客様に問い合わせを頂き、早速訂正するとともに、お客様が、何回位アクセスされたのかを確認するために、サーバーのアクセスログをチェックしてみます。

『８０回？』

いくら、付録にアクセスできなかったからといって、一人の人が本のデータに８０回もアクセスすることは有り得ません。

お客様の付録のダウンロードが終了した時点で、アクセスログをもう一度見ると、また、新たに８０人の人が来ていました。アタシと、本を買った人が一回ずつアクセスしたとして、それを引いても、他に７８人来ているということになります。

よっぽど俳句集の付録が欲しかったのかなあ。たははは。

ワードで作っただけなんだよっ。

付録の正常配信以降、電子本関係のCGーファイルへのアクセスは、通常に戻ったように見えました。

念のため、その他のアクセスログを細かくチェックしてみると、いつもと違う動きが認められます。

✧ まず、ファイル転送量が異常に多くなっているということ。
✧ CGーファイルに直接アクセスしている数が多すぎること。
✧ 本のデータにも直接アクセスしている人がいること。

うーむ。やはり、この本を盗んだ奴がいるのか・・・・。
『マニアックな奴だぜ。』

この、アクセスログを分析すると、こんな感じっす。

●どのように本を配信していたのか？

不正アクセスのログの分析の前に、まず、私が、どのように本を配信していたのかを、説明します。

『おじゃら・ねっとの本』は、有料の本と、無料の本に分かれています。

有料本の配布には、カンタンには盗んだりできないように、当時、自分で出来る限りのセキュリティをかけていました。

一つ目のセキュリティは、本（ＰＤＦファイル）そのものにパスワードを入れるということでした。本のファイルを開こうとするたびに、パスワードを入れないと、本が開かない構造になっています。

もう一つは、パスワードのページからアクセスして、買った方だけがパスワードでエンターし、本をダウンロードできる仕組みを取っていました。

パスワードでエンターする隠しページへのアクセスは、一週間程度でダウンロードできなくなるような仕組みもつけてました。（手作業）

有料本の配信は、

- お客様が『おじゃら、ねっと』の口座にお金を勝手に振り込んで、『振り込んだよ』というメールがくる。

←

- 入金を確認したら、パスワードとIDを発行し、アクセスするアドレスをメールでお知らせする。

←

- お客様は、IDとパスワードで指定されたページにアクセスして、本を開くパスワードを手に入れる。

←

- 本を開くパスワードを入力して、本をダウンロード。取引終了

という流れです。

アタシの認識の甘さは、ホームページ上の隠しページで、『本を開くパスワードを公開していた』という部分にありました。

例えば、本のデータの所在をつきとめて、本をダウンロードしようとしても、本を開くパスワ

←本を買いたい人は、勝手にお金を振り込んできて、メールをくれる。アタシは、ダウンロードページにアクセスするパスワードとＩＤを配布。

←

パスワードとＩＤで、ダウンロードページにアクセス。

←

ダウンロードページでは、本のダウンロードと本を開く第二のパスワードが配布される。

ードが解らなければ、本を開くことができないので安全なのです。

アタシは、この、本を開くパスワードというのを軽く考えており、（隠しページとはいえ）インターネット上で公開していたので、このページに直接アクセスできた人は、この、本を開くキーを入手でき、しかも、ダウンロードまでできるので、カンタンに本を読まれてしまったということになります。

このキーを盗むには、まず、ＣＧＩのファイルを探し当て、直接ＣＧＩファイルにアクセスしてソースを開き、本の場所と、ダウンロードサイトを調べるだけで、アタシ位のスキルがあれば、まあ、カンタンに出来るレベルといえなくもありません。爆。フツーの人にはムリですけど。

このダウンロードのページ上に本を開くパスワードをＷｅｂページで公開していたのが、初回の反省点ということです。

●緊急措置と新しい対策

このことにすぐに気づいたアタシは、日本に帰国する時期と重なったこともあり、パソコンを売ってしまったと言う理由で、ネットショップを休業するという、緊急の措置を取りました。そして、即刻全ての有料本をサーバーから削除したのです。

とはいいながら、サーバー上で削除したのは本のデータだけ。残りのCGIの仕組みやダウンロードのページなどは、全て残していたのでした。たははは。

どういうことかといえば、「タダで本がダウンロードできるよ」という情報を入手した人が、一生懸命ダウンロードページに直接アクセスし、何度もダウンロードボタンを押すけれども、本のデータは削除してあるので、本はダウンロードできずに、何度も作業を繰り返してアタマに来るという流れになっていたのです。

この話をすると、パソコン通の人たちは、みなさん、嫌な顔をします。

『オジャラよ。性格悪すぎるぜ。』と、内心思っている顔で笑う人多しでした。

休業中、ウチのサーバーに勝手にやってきて、本のデータ探された方、お疲れ様デシタ。

本をタダで盗もうとしているんだから、その程度のことをされても仕方ないよねえ。

月末には、何万人もの『見つかりません』データログが残されていました。まあ、ウチの場合、リンク切れでということもあると思いますけど。とてもじゃないけど、メンテするという精神状態に、立ち直ることができなかったっす。

有料で配布している本なのに、カンタンに盗まれてしまったのでは、お金を払っていただいた方に、申し訳ないっすから。おほほほほほ。

まあ、表面上もショップが休業なので、CGIに直接アクセスする方も激減しました。とりあえず、静かに次の流れを待っていたというムードです。

そんで、アタシも、本を開くパスワードを個別に設定する案でサイトを構築しなおして、ネット配信を継続しようと考えをまとめているところに、次の申し込みが来てしまいます。

日本に帰国し、ネット復帰したばかりで、ショップはまだ未着手の状態ではありましたが、二名様にお申し込み頂いたんで、早速、データを配信してみます。

そしたらね、来ちゃいました。２５人。

一人は、ダウンロードが終了した旨のメールも下さったので、真っ当なお客様だったと思われます。（データ盗む方は、ダウンロードが終了したら、メールをくれと頼んでいても、そのメールは送ってくれないのが普通。）

このときにはね、データ盗もうと思って、本のデータを配信するのを、待ち続けて、毎日アクセスしている人がいるのかなと考えたんです。

１ヶ月以上も放置している、荒れたサイトなのに？

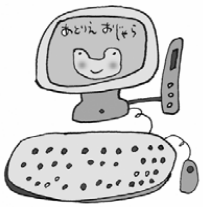
こうなったら、毎日チェックして、意地でも盗んでやるみたいな・・・。ネット上には、暇な人多いみたいだしなあ・・・。有り得なくはない。それに、今回は、本を開くパスワードも、個別に対応させていただいたんで、それがないと読めないっすからね。まあ、読めた方が何人いたかは不明ですが、とりあえず、買った人と、アタシ以外に２３人が本をダウンロードしたということは確認できました。

マジっすか？

たった一日だけ、サーバーに本のデータ送っただけで、この有様。

ひょっとして狙われている？（怖）
そんなこともあったので、アタシは、次なる対策を立てることに決めました。

それは、別サーバーを借りて、本の配信は、そこから行うという、もっと、安全度を高められる方法です。



Ａサーバーでは
本の案内などをする。

Ｂサーバーに本を
置き、そこでダウンロード
してもらう。

全く違うサーバーなので、
お金を払い、
ＵＲＬをメールでもらった
人以外、アクセスできない。

これであれば、本が置いてあるサーバーのアドレスは公開されていないので、アタシのサーバーの中を探し回られても、本のデータそのものを盗むことは不可能なんです。

他のページにアクセスした人と混じることがないので、データを盗む人意思を持った人を、より、確定しやすくなるということもあります。

まだショップを開店していないのに、よっぽど読みたかったのか、勝手に金を振り込んで、本を申し込んでくる人が、また二人いました。

そんなもんで、新しいサーバーに、本のデータを公開。

アタシの方では、一人当たりのお客様が、本に、どれくらいアクセスしているのかを調査したかったので、お客様ごとにアクセスを確認できるように、サーバー内を整備しました。

そして、フォルダ名とパスワードを、それぞれお客様名に設定して、新サーバーに公開してみます。

そこに、うさんくさいメールがきます。

『以前本を買ったのだが、パスワードが解らなくて本が開けないので、パスワードを、もう一度教えてくれ』というのです。

ふーん。

確かにこの方は、以前買ってくださった方でした。ダウンロード完了のメールを下さらなかったので、ちゃんと本を読めたのか、心配していたのです。

確か、25人来ちゃったときと重なります。

しかし、アタシも前に使っていたパソコンを壊してしまったため、昔のパスワードを確認するのは不可能になっていました。

そんなもんで、新たに、個別パスワードを設定して、サーバーに公開し、その方にももう一度、パスワードを発行して、データをダウンロードさせ、様子をみることにしてみました。

３名のお客様の名前とお客様の本のデータが、一つのサーバーに並んでいる状態っす。

アクセス状態を見てみます。真っ当なお客様二名からは、『ダンウロード完了。削除お願いします』というお返事を頂き、データを削除しようと思いましたが、忙しくて放置していると、一週間後、削除依頼のあったフォルダに、２５名のアクセスがありました。

これが、どのような状態かを分析してみましょう。（あくまでも推定ね。確信があるワケじゃないのよ。盗難のレベルを考えても、それほど高いと思えないので、この推理は間違っているかもしれないけど、読者さまは、あくまでも可能性ということで参考程度に見てください。）

第一案　真っ当なお客様二名は、速やかにダウンロード終了。パスワードを無くしたというお客様は、新しいサイトにアクセスし、『自分の名前のフォルダと、パスワードが一致していること』に目をつけて、サーバー内の他のフォルダを調査。（たぶん、全部ダウンロードするなどして、調べたんだと思う）

そうして、本の仲間などに、自分以外の本のアドレスを、公開し、データを他の人にダウンロードさせる。というような手口のように思われました。

何故そんな回りくどいことをしたかという理由は、自分がバラしたと悟られないために、他の人のフォルダにアクセスさせるという方法を取りたかったのだと思います。いやあ。ここまではしないかもなあ。ここまで出来る人なら、自分のサーバーにアタシの本を置いて、他の人に配布するということだってできるもんなあ。

第二案　一旦削除オーケーのメールを下さった方が、一週間経ってもダウンロードできるので、お友達にアクセス方法を公開し、みんなでダウンロードした。

どちらにしたって、３人しか申し込んでいないのに、２５人の方がアクセスし、（そのうちアタシも含め、４人を差し引いたとしても）２１人に、ダウンロードされたという事実は、事実っす。

アタシは、被害を広げないために、データ全てを、一旦削除します。

もう一度、この件について、考え直さなければなりませんでした。

「買った人がバラしている」。

しかも、2-3人じゃなく、20人に。

本人は、いいことをしている気になっているのかと思うと、ネット常連の人というのは、ホントウに性質が悪いと思わされました。

それでも、この調査は、正解だったと思います。買った人が、アドレスやパスワードを流して、他の人にアクセスさせているのであれば、こちらがどんなにセキュリティに金をかけたとしても、完全には阻止できないからっす。

そうだよなあ。それが、一番、手っ取り早いもんなあ。

何故、本を買った人が、ウチのサイトからデータを直接ダウンロードさせるのかといえば、本のファイルサイズが、ちょっと大きいからなのです。

ファイルサイズが5メガ程度あるので、メールで配信できないという物理的理由からです。（当時のメール環境は、今みたいに大容量ではありませんでした。通常のメールBOXは、3メガ程度までしか送受信できないのが普通。）他のデータは、もしかしたら、メールでやりとりしているかもしれないっすね。

ダウンロードされた形跡は感じられませんでしたから。

なるほどねえ。

ＣＤにコピーして、郵送で送ってあげるとかすれば、アタシをこんなに怒らせなくて済んだのにねえ。ははは。ネットで配信できると、盗む方も楽なのよ。しかも、奴は、金も手間もかからないもんなあ。

アタシは、アクセスログを見て、まあ、自分なりに考えただけなので、これが真実かどうかは解りません。

一人の人が、仲間数人に本のアドレスとパスワードを教えて、ダウンロードさせたという筋は、間違っていないと思います。前のときも、今回のときも、人数も似通っているから、同一人物の犯行と思えなくもありません。

私の電子本に感激し、全てをプリントアウトし、感想までお寄せくださった方が、その他２０人に不正にアクセスさせているとは、どうしても思えないからっす。

本は、役に立ち、興味深かったが、不正にアクセスさせて、うしろめたいので、返事のメールも感想も送らないというのは、人情なのかもしれません。

しかもオジャラよ。調査のために、わざと泳がせておくなんて、性質悪いぜ。
たははは。

ゴメンね。でもね、アタシは、この手口を知る必要があったのよ。

どうやって、本のデータが盗まれるのかをね。
今のところ、訴えたりする気はないから、ま、安心してね。うふふ。これ以上やられたら考えることにしよう。

どうせ取れたって、１４０００円だしなあ。

電子本の販売額なんて、所詮その程度だもんなあ。

でも、アタシを甘く見ないでね。うふふ。

●どう考えたのか？

不正アクセスの実態、買った人がアクセス方法をバラしている。ということが解ったのです。いくら金をかけても、阻止することができないという結論に至りました。

そんで、計算してみましたとも。

本は合計で5冊位売れて、収入は３５００円。

盗まれたと思われるデータの数は、１２０人としたって、８４０００円。（この中には、二回ダウンロードした人も入ってます。１００人としたって７０００円だけどなあ。）

やってらんないぜ。

これって、経費で申告できるのかなあ。ムリかなあ。どちらにしても、売れば売るほど赤字となってしまうものなのであれば、やるべきではないっしょ。

会社としての結論は、そうだと思います。

作者としての結論はどうなんでしょう？

折角本にしたのだから、多くの人に読んで欲しいのよ。バリ本や、自前の画集とは、質も価値も違うからです。

パソコンができて、自分が発信できる情報を持っていて、本を出版したいという全ての人に役に立つ画期的な本で、存在する価値がある本なのだから。

情報の発信に留まらない、新しい創造を産み出せる本ということなんです。

安く、本を出したいというニーズは、とても高いのです。

アタシは、帰国して、銅版画のお教室を再開しました。センセは、国際ブックフェアに行き、電子本のコーナーをウロウロしていたらしいっす。

アタシの本も見たかもねえ。

お教室の後、みんなでお茶しにいき、『画集を作りたい』という話になります。センセは国際的に活躍されているので、外国のアーティストなどから、CD版の画集を送られたりすると、自分も作りたいと、考えるようになったのだといいます。

俳句のセンセだってそう。金が無いわけじゃないけど、自費出版で、出版社のカモになるのもゴメンという気分が漂っています。電子本でもいいような気がしてきますよね。

どうせタダで配るんだし。沢山の人に見てもらえるし。みたいなムードでイッパイでした。

センセと名のつく人は、本を書くのが、次の目標となるようです。センセと名がつかない人だって、本を出版すれば、仕事の依頼がきたりする可能性が高くなります。

ホームページ程度より、もっと進んだ形。
本として認められるデジタルデータ。それが「電子本」なんです。

アタシは、（今のところ、売り上げは皆無だけれど、）出版社の社長なのだから、本を出したいという人のお手伝いをしなきゃいけないと痛感させられました。

身近な人でさえ、本の出版を切望しているのです。

予算がなければ、自分で勉強して、自力で作ろうと言う人だって、いないわけじゃないと思います。
アタシの本は、そういう人たちのために書いた本なのです。

スタート当時、盗まれやすい構造にして配信したアタシにも、問題がありました。

そして、問題を改善しても、解決できない問題があるということも理解できました。

今後のブロードバンド時代に突入すれば、大容量データだってメールで送受信できますから、私の目に触れることなく、買った人が、データをタダでお友達に配りまくるという盗難も出てくると思います。

この盗難には、気づくことすら出来ないということになるでしょう。

それでも、自分で本を作りたいという人がいる限り、アタシは、この本を売り続けようと思います。

本を出版するという夢が、安価に叶えられる、素晴らしい本だからです。

『いい本は、必ず読まれる』

私には、信念があるのです。

＊＊＊　ＣＤ版での出版に限定？　＊＊＊

アタシは、この部分についても迷い続けました。

ネット配信を完全に撤廃し、ＣＤ版だけで展開する。これであれば、サーバーから直接盗まれるということはありません。

盗まれたことが、アタシに発覚しないのであれば、ＣＤが読めなくなるまで使いまわし読みされたとしたって、そんなに腹は立たないだろうと思います。

でもね、ＣＤ版は手がかかるのよ。

まず、ＣＤを買いに行く。ラベルを印刷する。ＣＤジャケットを印刷する。ＣＤデータをコピーする。稼動をチェックする。封筒に宛名書きをする。梱包して、切手を貼る。郵便局に持って行って発送する。

ネット販売と比較すると、これだけの手間がプラスされるのです。

そんで、これだと、紙の本とたいして変わらないという気もしてきます。同じ内容なら、紙の本を買うでしょう。まだ、そういう時代なのよ。

電子本の最大の特徴は、デジタルデータで出来ているという部分なのです。

デジタルデータは、ネットで配信できるのです。

ネットで配信できるという利点を使わないのであれば、電子本の魅力は、十分の一以下に減ってしまうとアタシは考えています。

それほど、ネットで配信できる価値は高いのです。どんな本だって、買ったらすぐに読みたいのです。

本屋に行かずに注文できて、デジタルデータで配信してくれれば、すぐに本を読むことができるのです。

アタシ側にしてみれば、誰にも手数料を支払わず、本の代金全額を自分の収入にできるということになります。（通信費とサーバーの維持費はかかります。）

今までは、バリ島からCDを送っていたということもあり、ネット版より、CD本の代金がメチャクチャ高かったこともあり、CD版は、ほとんど売れませんでした。

この程度の盗難で、大騒ぎして、ネット販売をやめるべきではないのです。

もう少し手をかけていれば、かなりの状態で、データの盗難は少なくできたはずだし、パスワードの個別管理をもっと強化すれば、本のデータを盗んでも開けない人が圧倒的に多いはずなのです。

「パスワード無くしました」という人には、次回からは、パスワードの再発行など、しなければいいのです。

もし、本を開くパスワードまで解読できるような人（＝買った人）が、データを盗む目的を持って、不正にアクセスしてくるのだとしたら、ほとんどのセキュリティーでは、その盗難を阻止することは不可能なのです。

たとえば、一個一個、本を開くパスワードを変えたらどうだ？

と思う方もいるかもしれません。当然そうするのです。

そうしても、個々のパスワードというのは、ダウンロードした時点で固定になります。毎回変えたりはできないのです。

そのデータを、メールで転送されて、パスワードも一緒に転送されたとすれば、勝手に本を開けて、読めてしまうということになります。

ＰＤＦでは、ファイルをコピーできないという機能を付加することもできますけど、それだと、一回パソコンに格納して、あとでゆっくり読むということができなくなります。

本は、買った人が、好きな時間にゆっくり読めなければなりません。

アタシのサイトは、イロイロな人が丸ごとダウンロードしている気もします。

ネット上で本を販売するために、イロイロな仕組みがあるんで、どういう構造にしているのか、知りたいからかなあ。

こうなると、気持ち悪いのよねー。でも、丸ごとダウンロードされると、誰がダウンロードしたのかは解んないので、まあ、それだけが救いかも。たはは。

インターネットサイトを運営するってことは、それ位、色んなことがあるわけよ。

でもね、アタシは、辞めません。

続けるのであれば、我慢しなきゃなんないことも、見ないふりしなきゃなんないこともあるのよね。会社勤めだって同じでしょう。うん。

そんなこんなで、この先どうなるか解んないけど、ネットでの販売も、もう少し続けてみようと思います。

ＣＤ版も作ろうとは思うけどね。ネット販売と同じ値段ではやりたくないのよねぇ。

第二章

有料か無料か？

＊＊＊　有料か無料か　＊＊＊

『本として、書籍データベースに登録するためには、本は、有料で配布しなければならない。』

このことを知ったのは、『電子本　自前出版してみませんか？』を出版して、その図書コードを『書籍データベース』に登録しようとしたときのことでした。

その他に出版した、花の俳句集『花寄せ』という無料の本の図書コードも併せて登録しようとして、データを送信したら、『無料の本は登録できない』と断られてしまったのです。

前の本を書いたときには、この事は知らなかったので、今回、続編では、『書籍データベースに登録されつつ、沢山の方に読んでいただける』という、極秘テクニックも、追記しようと思います。

『例えば一円であっても、本を有料で配布せよ。』書籍データベースに登録するには、最低限の条件となります。別に、１００円でも、５０円でも構わないのです。

しかしながら、電子本の有料配布は、『本を読んであげてもいい』という人の読書意欲を大きく半減させるものです。

しかも、有料サイトの構築は、収入と比較して、膨大な時間と知識が必要になるのです。

作家なのだから、多くの人に読んでもらいたい。だから、本にしたのに、有料だという理由で読まれないというのは、どうにももったいない話です。

しかも、本までは作れたとしても、有料サイトの運営まで、自分で構築できる人は、あまり多くないと思われます。考えることが膨大で、よっぽど好きじゃないと、ウンザリしてくるからっす。

ぼんやり作っていると、盗まれるしなあ。

しかしながら、無料だと、書籍データベースに追加してもらえないのよね。

これでは、本として認められていないような気持ちでイッパイになりますね。

自前で図書コードを取得し、本を出版した場合、『価格が有料の本』は、申請すれば、書籍データベースに、無料で登録できます。図書コードの値段に込みってことなのかもしれないですが、これは、安いと思います。（１００個図書コードを取得すると、１８０００円なので、一冊当たり、１８０円で、書籍データベースに登録できるということを意味するからっす。）

アタシの場合は、図書コード18000円の他に、追加で6万円も支払って、書籍データベースに本を登録したあと、自分のサイトにジャンプできるように、リンクの投資をしてみました。

何故そんなことをしたのかといえば、書籍データベースに本が載り、直接自分のサイトまで来てもらえるということに、価値を感じたからなんです。

アタシの本は、インターネット上でしか販売しない。

インターネットで、本を買いたい人が、単語検索し、ウチの本に興味を持ったときに、直接ウチのサイトにジャンプできて、勝手に本の詳細情報をダウンロードしてくれたり、立ち読みできるというのは、画期的な仕組みのように思われました。（結果を言わせてもらうと、6万円の効果は、まだ認められないのよね・・・。）

アタシの書いたエッセイ、『バリ島★ぶうげんびりあ』は、BOOKSの本のデータベースで、『地球の歩き方』やら、『るるぶ・バリ島』などと一緒に、『バリ島』と検索すると、同じ書棚に並んで出てくるのです。（本当）

通常の本の販売は、ネットの本屋さんが、本の紹介サイトを作り、そちらでPRしてくれる、販売委託方式です。

出版社委託の場合、何千冊もの本と、自分の本が一緒に並びます。有名作家とも並ぶんです。

そうするとどうなるのかと言えば、知名度の低い、しかも電子本のアナタは、小さく扱われて、アナタの本を読んでくれる可能性のあるお客様に、発見すらされないということも出てきます。

書籍名だって、検索システムに引っかからないタイトルだったりすると、データベースのゴミと化し、誰にも見つけられもしないということだって起こっていますよね。今みたいにコンテンツが増えてくると、アナタの本は、益々、探している人に見つかり辛くなってしまうでしょう。

それと比較すると、ＢＯＯＫＳの書籍データベースは、直接、アタシのサイトにリンクを張ってくれているので、ジャンプした先はウチのサイトになるのです。

本棚には、自分の本（正確には、アタシが出版した本）だけが並んでいて、お客様に、効果的に、自分の本だけをＰＲすることが可能となるのです。

立ち読み版だって自分の所に置いているし、他の本だって、直接お客様に見て頂くことができるということです。

アタシは、ダイレクトマーケティングや、データベースマーケティングに親しんできたので、どうしても、自分でお客様に直接訴求して、その効果というのをチェックしたいという個人的な好奇心があるのです。

まあ、こだわりといえば、アタシのサイトのこだわりなのかもしれないし、趣味といえば、趣味だし、投資額を回収できていないのだから、模索中とか、失敗とかいうことなのかもしれないっす。

それでも、自分のサイトに、人が来てくれれば、絵を見てもらうことは出来るのです。

目的は、絵を見ていただくこと。その為に、自分でできることをボチボチ増やしているのです。

本の出版も、原点は、『多くの方に自分の絵を見ていただくこと』であり、それは収益よりも優先されているということが、ハッキリしているのです。

だから、イロイロな方法でサイトに来てくれる人の間口を広げたいですし、そのためのコンテンツも作っています。

電子本の出版は、その間口の一つに過ぎないということになります。

●無料の本へのアクセスって、何件あるの？

有料と無料の形態を語るのだから、この点が重要となります。

アタシの本の場合、エッセイ『バリ島★ぶうげんびりあ』は、月に2-300件、『素描』は150件前後の立ち読みのダウンロードが確認されています。（月によって違います。）

結構、読んでいただいている方だと思います。

それでも、お買い上げ頂いたのは、合計で十冊前後なんです。（少）

本音のところ、電子本は儲からないんで、辞めようかなと弱気になっているのは事実っす。携わっていらっしゃる方は、みなさんそう思っているとアタシは感じています。

当然でしょう。タダの本だってイッパイ存在しているし、ベストセラーは、発売から3日でブックオフに百円で並んじゃうし、買った人は、二十人に横流しするという実態もあるのです。

アタシの本は既に本が古くなってしまっていること、バリ島から送っていたことなど、当時は不正にアクセスできて、カンタンに盗めたことなど、買わない理由はイロイロあったと思います。

有料だと、せいぜいその程度しか売れないのが、電子本の現実じゃないかと思う。これが、発売から一年経つと、立ち読みは2-300人来ていても、販売できる数は、ゼロになります。

「電子本自前出版してみませんか?」は、毎月立ち読みが600人以上来ているのに、一冊も売れないのです。買われない本は、存在しないのと同じです。

まあ、初回の本であり、文章が稚拙とか、絵が下手とか、買うほどでもないという、そういう別な理由もあったと思います。買う方も、電子本って何だか理解できていないということもありますよね。アタシがスタートした時期は、電子本が今ほど普及しておらず、まだ新しすぎたということもあったと思います。

その後、アタシは、無料の本なるものにも、手を染めてゆきます。

ネット上で俳句を教えていただいており、アタシは、お礼に、電子本の句集としてまとめて、プレゼントすることにしました。

『花の俳句集　花寄せ』

確か、2．5メガ程度の、電子本です。

表紙や挿絵には、アタシの絵も入れさせていただいて、参加者の俳句を綴った、楽しい思い出となりました。

この本は、無料で配布することに決定していたので、アタシのサーバーに、内容の間違いがないかどうか、テスト版をアップしたときのことです。

なんと、1週間で1000人以上もの方がダウンロードしたのでした。

句集の内容をチェックして欲しい方は、20名程度。その方だけが確認してくれればヨカッタのですが、物凄い反響がありました。

アタシの立ち読み版も、これくらいアクセスがあればなあと、思わずにはいられない数でした。

これは、何を意味しているのかといえば、俳句を趣味にしているの方の、『句集を作る』という関心の高さ、『俳句をネットで楽しんでいる人口の多さ』ということが根底にあると思います。

アタシは、俳句の事を軽く考えていましたが、細々と運営してきたアタシのサイトなどと比較して、信じられないほどのパワーを秘めていることを、認識せざるを得ませんでした。

アタシが俳句を真剣にやろうと思ったのはこのときからです。

そうして、残念でならないのが、この本は、配布金額を無料にしたため、書籍データベースには掲載してもらえないという一点です。

最初の本の出版から何ヶ月かが過ぎ、アタシは、『電子本、自前出版してみませんか？』を出版することにします。

俳句のお友達は、句集を出したい人が多いと聞いたので、『句集の作り方』なる付録も作ってみました。

サンプルではありますが、自分でも、自作の俳句フォーマットを使って句集を作ってみようと思い立ち、自分の俳句集も完成させてみます。

それを見て、自分も作ってみようと思う人がいるかもしれないと考えたのです。

俳句集は、文字数が少ないので、あっという間に作ることが可能です。最新の絵を挿絵に使ったりして、本は、いい感じに完成しました。

ネットでの配布を無料にするか、有料にするか、かなり迷ったのですが、この本は、無料で配布することに決めます。

無料で配布するというのは、図書コードをつけられないということを意味します。図書コードをつけられないというのは、本ではないということなのです。

それでも、多くの人に読んでもらえる可能性があります。

選択の基準は、作者が、どちらに価値を見出すかということだと思います。

本として、認められるのか？

それとも、多くの人に読んでもらう方を優先するのか？

アタシは、多くの人に自分の絵を見てもらいのです。その為に本を出版しているのです。

『句集は無料で行こう』

そう決めて、句集『アトリエにて』の配布をスタートを開始しました。

結果は驚くべき数を記録しました。3日で千人以上の方が、ダウンロードしてくださったのです。

俳句集ということで、データが軽かったこともあると思いますが、前の俳句集でも、ダウンロード数は、軽く1000件は超えていたので、まあ、無料の句集

であれば、これくらいはダウンロードされるのが、普通なのかもしれません。

ところが、同時期に、『セニワティのグループ展画集』なる、電子画集も無料で配布を開始したのですが、こちらは、１００件にも満たないアクセスしか認められませんでした。

ファイルサイズが大きかったこともありますが、画集そのものへの関心が、ネット上で低いということもあると思われます。

絵を描く人たちの関心は、ホームページ構築のことでイッパイで、まだ、電子画集まで、情報が広まっていないというのもあると思います。

第一、画集出版が必要なほど才能がある画家は、パソコンすら持っていない可能性もあるもんなあ。たははは。

どちらにしたって、『無料本』には力があるということは実感できました。

最も理想的な形は、書籍データベースに登録できて、無料でも配信するという、両方をクリアできる裏ワザでです。

今年、第二回目の句集を出版するときに、アタシはひらめきました。ネット上の配布は無料として、ＣＤ版は有料とし、ＣＤ版には図書コードをつけて配信する。という方法です。本を定義するときに、ＣＤの本と、電子本は、別な品物として考えるからです。

これであれば、書籍データベースには登録されるし、勝手にダウンロードしてくれる、推定１０００人以上の方に、読んでもらうことができることになります。

大事なのは、本としても認められ、書籍データベースで『俳句』と入れたら、ウチで出版した本が引っかかってきて、俳句のサイトにジャンプしてくれて、仲間になってくれるということなのです。

俳句集といったって、イロイロあるんです。自費出版系の俳句集がほとんどで、しかも、二００部程度作ったって、ほとんどを知人にあげてしまうというのが普通だと思います。

俳句集なんて、俳句をやっていない人には、無い方が良い本なんです。

ムリやり売りつけられたりしたら、その思い出は嫌な思い出として、あとあとまで残ってしまい、人間関係を悪くしさえもします。

自費出版の本とか、俳句集なんて、所詮、他人にとってはゴミ程度の価値でしかありません。

作ったあとは、配りきれなかった本の在庫に埋もれた人生が続いてしまうなんてことだってあるんです。

それが現実であれば、電子本で安く作り、無料で配布して、より多くの方に見ていただけるように工夫する方が、よっぽど価値があるのです。

自分の俳句を、俳句が解る人に読んで欲しいから、句集にするワケですから。

同じ理由で、自費出版しようとしている人は、高額な出版費用と、買ってくれそうな人の数を計算して、どうしたって、辞めるべきじゃないかと追い詰められてくるのです。

そんな方は、まず、『電子本、自前出版してみませんか?』を読み、ワードで原稿を作ってみたらどうでしょうか?

まず、ワード原稿を完成させて、どーするのかを考える。それが一番っす。

第三章

画集を作る際の、画像データの扱い

＊＊＊　画集を作る際の、画像データの扱い　＊＊＊

写真や絵画を制作している方は、画像にこだわりすぎる傾向があり、デジタルデータとしての割り切りが出来ていないと感じます。

理由は、この筋のマニュアル本の著作者のほとんどが、写真撮影関係者とか、映像関係から画像加工をしてきた人たちが書いているからです。

映像関係者の映像への思いは解ります。

けどねぇ、解像度に対する執着は、ネット公開では、重いだけのサイトやファイルになって、物凄く効率が悪い結果を招いているということには、あまり触れられていないんです。

解像度への知識を正しくガイドしてくれる本は、ほんの一部で、初心者は、そのことを、ちゃんと説明してくれている本を、大量にある書棚から、見つけ出すことができないという、別な問題もあると思います。

アタシは、運よく、気持ちの良い本に巡り合えて、ラッキーでした。

もう、五年以上前に買った2冊の本は、誰かにあげてしまい、ここでご紹介することが出来ないのが残念っす。

＊＊＊　画像データについて、どう考えるのが正しいのか　＊＊＊

ＷＥＢの場合、電子本の場合、オフセット印刷データの場合と、それぞれに、最適なサイズというのが存在します。

その辺を、それぞれの媒体に合わせて、割り切って加工するというのが、一番正しい作り方なのです。

それが、『デジタルデータに対する割り切り』です。

この章では、最も加工効率がよく、安価に配布できデジタルデータのあり方をご紹介したいと思います。

まず、私が『デジタルデータと、自分の作品の品質』をどう考え、どう利用・加工してきたのかをご紹介しようと思います。

＊＊＊　デジタルデータと、自分の作品の品質との折り合い　＊＊＊

自分の写真やアートを、印刷物や、WEB画像に加工しようとするときに、全てのアーティストは、『自分の作品を、できるだけ忠実に印刷物に表現したい』と考えます。

そうして、初めて印刷物になったときに感じることは、『やはり、実物と印刷物は違う』という落胆なのです。

そうです。ホンモノとは違うのです。

当たり前でしょう。ホンモノと印刷物が同じ品質であるのなら、誰もホンモノと接する必要がないじゃないですか。

印刷物にする目的は、他にあるということです。印刷物の品質が、ホンモノよりも劣化しているというのは、当然のことだし、作家は、まず、それを受け入れなければなりません。

逆に、自分の作品を印刷物にすることによって、自分の知名度を上げるために、どう利用していくのかということを考えましょう。

もっと前向きな方向に発想を転換させ、多くの人に、安価に作品に接してもらい、ホンモノにも触れられる場所まで足を運んでもらう。そういう使い方が正しいのです。

今までそうやって、作家と印刷物というのは、相互に発展・成長してきたのだと、アタシは信じています。

そうして、自分の作品を印刷物や本にして、発表してきた人の中から、作品を認められ、有名になった人というのもいないわけじゃありません。

実際に、有名になった人の全ては、優れた作品が、印刷物より先に存在しているということだけは、揺ぎ無い事実なのですが・・・。

今までの問題は、印刷物や本にする費用が、メチャクチャ高くて、優れた作品を持っているにもかかわらず、本を作ることができずに、世に、作品を認められることがなかった人が、沢山存在するという事だと思います。

逆に、作品はもう一つでも、資金はあり、本を出すことで世にでて有名になった人は運がヨカッタ方だと思います。

一般的には、作品がもう一つで金がある人は、出版社や図録作成会社、画壇の食い物にされている場合が多いのです。

本を作れなかった方も、食い物にされた方も、どちらも、ついてなかったっす。

しかし、時代は進化しています。

まず、WEBの時代が来て、自分の作品をデジタルデータに加工して、多くの人に、インターネットを通じて、安価に見ていただくことが可能となりました。

情報のデジタル化の流れは大きくなり、いよいよ、電子本が出現します。本を自分で出版できる時代が来たということです。

印刷物だって、画像の場合、現在は、全てがデジタル化されています。要するに、作品の写真を撮影し、一旦デジタル画像にして、それを印刷するデータに加工して印刷機にかけているというプロセスを通っているということです。

そんじゃ、デジタル画像データって、印刷物と、どう違うの？

素朴な質問っす。

でも、これから、画集や写真集を電子本で出版したいアナタは、デジタル画像データのことをちゃんと理解しておくと、ぐっと作業効率が上がってゆくのです。

デジタル画像データと、印刷物の、最も違う点は、デジタル画像データは、パソコンで見ることができるという部分。印刷物は、デジタルデータが、紙に印刷された結果だという所です。

印刷物が、紙に印刷された結果であるのに対し、デジタルデータはもっと、柔軟（ソフトウエア）なのです。

パソコンやケータイで見ることができて、インターネットで送受信することもでき、しかも、受け取った人が、その画像を印刷することもできるのです。

印刷物よりも、「通信できる情報」としての付加価値が高まっているということです。

画像データに特化して考えるとどうでしょうか？

ＷＥＢサイトの画像を、プリンタで印刷したけれども、自分が思っていたほどには、うまく印刷出来なかったということを、多くの人が経験していると思います。

デジタルデータというのは、印刷物と同じように、劣化してしまうのを割り切らなければならない画像ということなのです。

デジタルデータをパソコンで表示するとします。その時の、加工のポイントというのを考えてみましょう。

- 『印刷物と比較したとき、画面上ではどこがどう劣化するのか？』
- 『表示サイズはどのサイズが最適なのか？』
- 『画像をどの程度圧縮すればいいのか？』
- 『ダウンロードする時間は、どの位が最良なのか？』
- 『プリントアウトして利用するのかしないのか？』

アタシが、デジタルデータを、1万枚以上加工して、ホームページを作ってきた経験では、この中で一番重要なのは、『短時間でダウンロードできる』という結論に至りました。

バリ島に滞在していて、劣悪な環境で、膨大な情報を送信するには、画像データを圧縮するしか選択肢が無かったという、特別な事情があったかもしれません。

日本にいたときには、ケーブルテレビ回線が目新しい頃から、使い放題に慣れていたので、バリ島に行き、

初めて、ダウンロード時間の問題に直面したのでした。

昨今のブロードバンドの普及により、多少の画像データの重さは、気にならないと言う人がいるかもしれませんが、アクセス環境は人それぞれなのです。電話でつないでいるひとだっているし、今は、ケータイで見ている人もいるのです。

私のサイトが、多くの方に読まれてきた理由は、サイト全体を軽く作っているからだと信じています。どんな環境の人でも、負担が軽いように設計してあるのです。

画像が沢山あるのに、軽いのです。
それは、画像を最大圧縮してアップロードしているということなのです。

画像の劣化を承知の上で、沢山の画像を見てもらうページ作りを選択したのです。

画像がＷｅｂページ上で、長時間開かないと、お客さんは去ってしまいます。
せっかく作ったホームページも、自分の作品も、見てもらうことなく、去られてしまうのす。

せっかく来て下さったのに、絵は見てもらえないのです。

絵を見てもらうために作ったサイトなのだから、見てもらう努力をしなければなりません。

作品を発表する者にとっては、究極の選択です。

しかも、最近は、デジタル機器が充実してきて、スキャナーも、カメラも高解像度でデータを取り込めるようになってきて、パソコンだって、大容量に対応してきました。

気合の入りすぎた作家さんは、HP用の画像なのに、最大解像度で、画像を取り込んだりしてしまうのです。（↑ウチの銅版画のセンセイ。一ページ目のスキャンで、パソコンがパンクし、断念したとの報告あり。）

現実、このような方は、多いんじゃないかと思います。

ここで、印刷物の解像度とWebの解像度を比較するために、知るべき情報は、『通常の印刷物の解像度が、いくつなのか』です。

アタシが知っているデザイナーの方は、印刷機にかける作品の解像度を 365dpi で作成して納品しているのだそうです。（それは、印刷機の解像度の最大が365dpiという理由により、そのサイズに設定しているのです）ですから、アタシも、そうしています。

ということは、365dpi以上で、アナタの作品をスキャナーで取り込んだとしても、オフセットプリンタは、それを以上を処理できないので、結果的には365dpiに圧縮されて、印刷するということなのです。

ふーん。そうなのか。

だから、小さい写真なんかを大きく引き伸ばして、自宅のプリンタでプリンタするときでなければ、高解像度で画像を取り込んだりしてはいけないのです。

作業のほとんどがムダになってしまう上に、パソコンのハードディスクにも負担がかかってしまいます。

基本的な知識がないというのは、今画像を取り込むときに、その作業が、ムダな作業なのか、最適なのか、何をもっと効率化できるのかということも判断できないということです。

一枚、20分かけて、超高解像度（2400dpi）でスキャンして、パソコンがパンクしてしまったのに、実際には、ある程度以上（365dpi）の解像度で取り込んだ分は、全く必要なくて、印刷機にかけるまでに、不要な情報となって、結局は捨てているということです。

これをリンゴに例えてみます。必要な数は365個だったのに、2400個も買ってしまい、2035個は、腐って捨ててしまい、損をしたというのと同じなのです。

画像取り込みに二十五分かかるのか、五分で済むのかという話なのです。

二十五分かけて取り込んでも、五分分のデータしか使われないのであれば、はじめから、五分で取り込むべきでしょう。

であるからして、パソコンに画像を取り込むときに、必要な解像度の上限は、印刷物に使う場合であっても、370dpiあれば、十分ということになります。

この数字が、紙に印刷する画像を含めて、全ての画像データの基準となります。

最近は、もっと、細いインクノズルで、もっと高い解像度に対応している印刷機もあるらしいです。

アタシは、そのマシンの話は良く知りませんが、もし、アナタが出版費用を抑えるために、安価に出版したいと思うのであれば、お高い技術の印刷を選ぶべきではありません。

アナタの作品が優れていて、画廊や美術館が（儲かると判断し）画集を勝手に作ってくれるというときに考えれば良いことなのです。

今覚える数字は、365dpiというオフセット印刷の解像度の数字です。

次に、WEBについても、その画像の特徴を知るといいと思います。

WEBで画像を作る場合の解像度は、75dpiと決まっています。

たとえば、150dpiで作られた画像は、ホームページ用のhtmlファイルに貼り付けると、解像度は勝手に75dpiに圧縮されて、その代わり、ファイルの大きさが、倍になって表示されてしまうという現象が起きてくるのです。（最初は、5cm*5cmで、解像度が150dpiの画像を、ホームページに貼り付けたつもりでも、貼り付けた途端に、10cm*10cmの75dpiの画像に置き換わってしまうということっす。）

こちら側は良い画像を貼り付けたのに、ネット上で表示したときに、画像の大きさや解像度が勝手に変わってしまうので、ホームページ初心者は、作品を展示する時に、ますます混乱するのですが、ここで知るべき知識は、ホームページ上で、画像を表示するのであれば、75dpi以上の解像度は必要ないということです。

中にはいるんですよ。300dpi位の画像を、一旦ホームページに貼り付けて、巨大になった画像の表示サ

イズを小さくして、作品がよく見えていると勘違いしている人が。
でも、その方法は、見る側のダウンロードに時間がかかってしまうだけなのです。

作家の自己満足に過ぎません。そういう人の作品は、見る人の事を全く考えない、ひとりよがりの作品が多いです。そんな作品を一時間もかけてダウンロードした上、パソコンまで壊れた時には、アタシはブチ切れます。

性格というのは、作品に表れるのです。

中には、高解像度で作品を貼り付け、そのままＷＥＢ展示している人もいます。その場合、長時間待たされて、しかも、はみ出た絵をスクロールしながら見なくてはならず、ほとんどの人は、一枚も見ずに去って行くのです。（本当）

アナタが、高解像度で、どんなに作品を展示したくても、ＷＥＢ上では、画像の表示サイズが勝手に大きくなってしまうだけで、解像度は変えられないのです。

逆に、高解像度の画像を大きいまま貼り付けると、見た人がデータを盗んで、加工して印刷したりもできてしまうのです。

高圧縮のデータは、作品が劣化しすぎますから、印刷や加工利用には適さない。従って、作品を盗用などのリスクも、少なくなると私は感じています。

ただ、高解像度の画像を、後でWEBサイズに縮小する方が、最終的にキレイに圧縮できるので、最初の画像の解像度は少し大きめ(100-150dpi)で取り込んで、最後に、適正なサイズ(75dpi)に、圧縮するという方法をアタシは取っています。

そんじゃ、ここで、どういう作業をするのが最も効率がいいのかという話です。

印刷物にもする場合は、最初のデータは、370dpiで画像データを取り込み、加工します。

WEBのみで利用する場合には、初回の取り込みを150dpi程度にし、トリミング、明度の調整、サイズの調整などを行い、最後に75dpiに圧縮してWEB上に貼り付けます。

そういう作業をするのです。

アタシのweb画像のオススメサイズは、『画像の大きさはパソコンからはみ出ない。』これに尽きると考えています。

そうして、『沢山の人に見てもらう』というのが、一番の目的なのだから、『表示が速くできるように加工する』が一番で、画像は画面からはみ出ない。これが、二番目に来ます。

貴方の作品が、どの位素晴らしいのか知りませんが、WEBで展示するということは、貴方の作品を劣化させて表示するという行為なのです。

それでも、無いよりはあった方がイイに決まっています。

ホームページの素晴らしさは、来ていただいた方と、直接コミニケーションが取れることなのです。

写真家や、画家であるのなら、自分の作品の知名度を上げる活動もしなければなりません。

知名度が上がれば、作品の価値は上がるし、作品に価値があれば、仕事の依頼が来たりもします。

手っ取り早く実力を見てもらうのは、ホームページが一番です。

たまたま、自分のホームページを見てくれた人が、作品を買いたいなどと、言い出すかもしれません。（滅多にいませんが、ゼロというわけでもないのです。）

中には励ましの言葉を寄せて下さる方もいて、元気がでます。そういう言葉に刺激されて、新しい創作意欲も沸いてきます。

ホームページというのは、不特定多数の人に、自分の作品に触れてもらう、最も安価な方法だと、アタシは考えています。（モチロン、自分で作ればの話ですが・・・）

電子本の作成というのは、ホームページの次のステージなのです。

ホームページが無いと、自分の本を人にダウンロードしてもらったりする窓口がないので、認知が行き届きませんから、結局、本は、知られること無く埋もれてしまいます。

電子本が、ＷＥＢページよりも優れている点は、高解像度で画像が扱えるので、より実物に近い作品を、お客様に見ていただくことができるという点なのです。

本という形を取っているので、有料での配布もしやすいです。

モチロン、ＷＥＢサイトでも、有料サイトはありますが、アタシが冒頭で書いたように、サーバーにデータを置きっ放しにすると、簡単にデータを盗まれてしまうという問題も抱えているのです。

電子本にして、ＣＤ版で配布すれば、確実に有料で配布できるし、盗難の心配もありません。

毎年開いている、自分の個展の画集なんかを作って、時系列で記録しておくこともできますし、パンフレット代わりに、外国の友人に送ったりもできます。

マスターCDと、CD-RWがあれば、自前で、必要な分だけ本を作って、配布できるのでムダがないということです。

図書コードを取り、書籍データベースに登録されると、出版者の連絡先等も公開されるので、貴方の本を見た人で、仕事の依頼をしたい人や、インタヴューしたい人などから、連絡が入るかもしれません。

本にするという行為は、WEBサイトと比較すると、出版者には責任があるし、所在が明確になっているので、情報の信憑性という面で価値が高いと考えている人は多いのです。

どこの誰が作っているかも解らない、信憑性の無いWEB情報とは、区別されているのです。逆に、本の情報を元に、作家にコンタクトを取り、次の仕事のチャンスが舞い込むというのも、物凄く多いのです。

ここで、新たに出現した、電子本のデータを、どの程度のクオリティで作ればよいのかという疑問が起こります。

高解像度の作品を、電子本に掲載するには、画像の解像度を、WEB画像より、高解像度で作って、貼り付ければよいということになるでしょう。

しかしながら、印刷物よりも大きいサイズで作る必要もありません。あくまでも、デジタルデータなのだから、最大でも、印刷物と同程度であればよいのです。

逆の問題として、画像サイズが大きくなると、ファイルサイズも大きくなってしまいます。ネットで配信することも想定して、手ごろな大きさで本を完成させるということも念頭に置く方が好ましいのです。

アタシの電子画集の場合、ほとんどを150-200dpi 程度で作っています。画集の場合、300dpi(デジタルカメラのファインモード)の事が多いです。これ以上大きいと、パソコンに負担がかかり、製作時間がかかりすぎて、効率が悪くなるというのに、完成度はたいして変わらないからです。

もちろん、自分の作品集なのだから、もっと丁寧に、もっと高解像度で作りたいという人もいると思います。それはそれで、アタシが作業するワケでもないし、アナタが大変なだけなので、構わないと思います。

でも、どんなに時間をかけて、一生懸命作ったからといって、完成した作品集に大きな差が無いのである

とすれば、短い時間で作れることの方が、価値が高いのです。

時間をかけて作るべき作品は、自分の作品の内容であり、電子本は、ホームページよりも、ずっと高解像度の画像が扱えるのですから、ある程度の品質を保てればオーケーと、割り切ることも大切だと私は考えます。

本作りに時間がかかりすぎると、作品作りの時間を削らなければならないからです。デジタル画像は、所詮、デジタル画像以上のものにはならないのです。

実物作品の認知や、自分のイメージや知名度を上げるための一手段として、使えるだけ使う。望まれる使い方としては、ＷＥＢや、電子本として公開し、実物を見に来てもらえるように設計して、読んだ人を動かすということなのです。

作品が優れていれば、必要な情報を発信し続ければ、人は勝手に集まってくるのです。良い作品は、誰だって見たいのです。

これが、作家のデジタルデータに対しての、正しい理解の仕方だと思います。

電子本の画像の扱いは、印刷物とWEBの中間程度の画像品質で、五メガから一〇メガ程度のファイルサイズを目標にするのが、ベストと考えています。

作品集の価値は、作品そのものも大切ですが、作品の点数も重要な構成要素になるからです。

掲載作品の数が多ければ、画集作成に金がかかりすぎてしまう。これが、今までの紙に印刷して出版する場合の、現実的な問題でした。

しかし、自分で画集を作れるのであれば、自分の作品全てを掲載することだって可能となるのです。

画集を買う方にしてみれば、掲載作品の数が多ければ多いほど、得をしたと思ってくれるのです。作家側は、一枚でも多くの作品を本として、世に残したい。

これらを勘案すると、作品数の多い作家さんは、何冊かに分けて、本にするといいと思います。

＊＊＊　買った人がプリントできる画集　＊＊＊

そうして、アタシが薦める電子本作りの最も特徴的なところは、お客様が気に入った作品を、自宅のプリンタで印刷して、身近な場所に飾れるという部分だと思います。

アーティストの中には、自分の作品を、印刷して、飾られたりしたら、自分の作品が売れなくなると危惧する人も多いかもしれません。

アタシは、デジタル画像を長年扱ってきて、ケータイも、ブックカバーも作ってみましたけど、ファンの皆様は、ケータイの画像に、アタシのポストカードの作品をよく使ってくれています。

会ったときに、ケータイを見せてくれるのです。『毎日見ています』ってね。

本当の話っす。

タダで配布しているものに、人は集まってくるのです。

アタシには、マーケティングの知識があります。お客様の商品に対する認知や、接触の頻度が高まると、好感度がアップするというのが、マーケティングの基本です。

もし、この理論が正しいのだとすれば、アタシの絵を、ケータイに使ったり、ブックカバーにして持ち歩いたりするだけで、アタシへの好感度が、日々アップしていくことになるワケです。悪い話ではないと思えてきます。

アタシの商品を、お客様が金を出して、紙やら、インク代やら、アクセス費用などを支払って、勝手に印刷し、宣伝までしてくれるのです。

いつか、本格的に、絵の販売を始めたら、買ってくれるかもしれません。買ってくれなくても、応援してくれるかもしれないじゃないですか。

絵を誰が買っているのかというのを研究すると、ホンモノの絵を買うか買わないかというのは、アタシのファンかファンじゃないのかというのかとは、全く関係ないということが解ってきました。

ホンモノを持つために金を出してもいいと思うか否かという、個人的な価値観なのです。これは、ファンとか、ファンじゃないとかと、全く別な話であり、日本人は、ホンモノを購入して身近に飾るということにまだ慣れていない人が圧倒的に多いのです。

金を出すのであれば、いくらまでなら出せるかとか、予算的な部分もあると思います。

日本のアート市場は、お客様の手に渡るまでに、値段が上がりすぎていて、普通の人が買えない場所にある場合も多いのです。

日本にいると、ホンモノに触れるチャンスがあまりないので、ホンモノを持つことに対して、どうも、不信感やら、経験の無さなどが表にでてしまいます。

正しい決断が出来ずに、結局買うことができないという人も多く見かけます。販売している側の、長年の不誠実が、「絵は、ニセかもしれないので、買わない」という結果を招いているといえなくもありません。

日本人の、金はあるけど、文化面での教養がない(印刷物とホンモノが見分けられない)という部分には、ガッカリしないわけでもありません。

『自分は金持ちしか狙わない』という言葉を画家の口から聞いたこともあります。それは、ある意味、セグメンテーションが明確で、マーケティングのアプローチとしては、正しいし効率的なのでそういう価値が存在するというのは否定しません。

私の場合はその逆で、私の作品を安価で身近に親しんで下さる方が沢山いるとイイという理由から、版画の作品も多く手がけているのです。

版画だって印刷物の一つなのです。印刷物を高く売ろうとして、付加価値を付けているというのに過ぎません。

デジタルデータを、お客様が、お客様の費用で印刷して、額に入れて飾って下さる。結構な話じゃないですか。

本当のアーティストなら、自分の作品に親しんで下さって、身近に飾りたいと思ってくださる方が多ければ多いほどいいと思うんじゃないかと思います。だから、展覧会で、自信作品のポストカードなどを作り、安価に配布するという方法も取るのでしょう。

どんなアーティストも、絵や付随するデザインなんかを誰に売って、どうやって生計を立てようかと考えています。

画集を作って販売するということは、ある種の画家の仕事と言えなくもありません。

でも、実際の所、画集で生活している画家さんというのはほんの僅かなんじゃないかと思います。アタシは、池田満寿夫さんと、山本容子さんくらいしか思い当たらないのです。

ほとんどの場合、出版社が儲けているか、もしくは、作家さんの持ち出しのはずなんです。

もし、画集制作が赤字なのだとすれば、事業としては失敗なのです。

電子本を自分で印刷できるデータに加工するというのは、ポストカードの既製品などを準備するよりも安くできるのです。

電子本を印刷できるデータで作れば、本を買った人が、勝手に、自腹で印刷し、額まで誂えて飾ってくださるのです。

モチロン、ある程度の制限はつけています。自宅や会社にあるカラープリンタで普及しているサイズは、Ａ４のインクジェットが普通です。

このサイズ印刷したときの最大サイズと考えて、画集を作れば良いということになります。

Ａ３のカラーレーザーで印刷したとしても、まあ、多少画像は荒れるけれども、印刷できなくはありません。

アタシがオススメしている電子本の品質は、その程度のクオリティなのです。

そんなこんなで、もし、貴方が、自分の本を販売したお客様が、自分のプリンタで、アナタの作品をプリントアウトして、身近な所に飾ったら、ホンモノが売れなくなってしまうと不安になるのだとすれば、それはアタナの作品に力が無いからだとアタシは思います。

デジタル画像に加工すると解りますが、ホンモノとは、圧倒的な差があるものなのです。

サイズだって、Ａ４サイズでプリントすることを想定して、画像を縮小して画集を作っているワケだから、アナタの実物の作品が、それよりも、もっと大きい場合、作品と印刷物が並んだときには、その差は歴然です。

それは、自宅のプリンタで印刷した場合でも、印刷屋さんに頼んでオフセット印刷してもらった印刷物でも同じことなのです。

自分の作品を写真で撮影して、ポストカードに印刷したときに、ほとんどの作家さんが、ガッカリするのと同じように、実物の作品のクオリティは、印刷物で表現することは不可能なのです。

製作費が一冊４０００円もかかった画集を、１万円で売ろうと思ったって、そんなに沢山売れたりはしないのです。

結局持ち出して、絵を買ってくれそうな人にタダであげたりしちゃうのです。

それが現実なのであれば、作成コストが安価な方に価値があるでしょう。データ加工とネット配信だけすれば、あとの費用は、ダウンロードした人が、勝手に印刷してくれて、勝手に飾ってくれるのであれば、それは、それで、作家の負担が軽減できて、価値があるとアタシは思うのです。

画家が稼ぐのは大変なんです。出費を最小限にするという努力も同時にしなければならないのです。出費を抑えられれば、絵を描ける時間が延長されるのです。

インクジェットで、自前のＡ４ポスターを作るのだって、最低でも、一枚７０円程度はかかってしまいます。その分を、自分で負担しなくていいなんて、画期的だとアタシは思います。タダだと、一万人が、勝手にダウンロードしてくれるんですよ。どー思います？

ポストカードの在庫も持たなくていいし、在庫をどうやって配ろうかとか、どこに置こうかなど余分なことを考えなくて済むようになります。

しかも、優れた芸術作品ほど、写真映りもいいというのも事実です。

アタシは、セニワティという、バリ島のアーティストのグループ展の画集というのを作ってみました。このときに、作品をカメラで撮影して、本の上に置いていくと、作品の優劣は、実物をみるよりも一層際立ってきます。

アタシは、友人の作った石のオブジェの写真映りが素晴らしかったので、会場では一度も気づかなかったその作品を手に入れたくて、慌てて、自分の作品との交換を申し出たくらいです。

パソコンで見る方が、紙の上で見るよりも、ヨッポド透明感なんかが表現できる作品も多いです。(実物以上ということあります・・・)

そうして、電子画集の最大の特徴は、紙に印刷することを排除したというだけで、製作コストが、メチャクチャ安くなるという部分なのです。

多くのアーティストは、貧乏と決まっています。

何故貧乏なのかといえば、製作を続けるにはお金が必要だし、日本は、生活費がメチャクチャ高いのです。

運良く賞を勝ち取ったら、それはそれで、画廊やら、画壇の食い物になり、入ってきた金は、イロイロな行事に回さなければなりません。

賞などを取れば絵の価値が一度に値上がりしてしまうので、今まで買って下さっていた人が、新しい作品を買えなくなって、結局貧乏な生活が続くなどのシナリオが無いわけでもないのです。

そんな物入りな中、電子画集を自分で作ったり、電子本という形で、画集が、今までの何分の一もの値段で作れるのであれば、価値はあると思います。

何百万円も払った上に、大して効果だってあるかどうかも解らない画集は、時間が経てば古本となり、結局個展に来てくれた来客者に無料で配ったりしなければならなくなる可能性もあるますよね。

処分できないほど画集を作ったからといって、絵の販売に結びつくとは限らなりません。(それでも、画集を持っている人には営業チャンスが増えるとは思います)

アタシがオススメしているのは、自分で作るという案なので、まあ、ホームページ作りも断念したような、パソコンのスキルが低い人には、大きなチャレンジだと思います。

でもね、諦めたらそこで終わり。

自分の作品を画集としてまとめて、多くの人に見て欲しいという、強い気持ちがある人なら、必ず作れると、アタシは信じています。そういう方の為に、この本を書いたのです。

アーティストは、自己主張しなければならないし、自己主張は、金が無い人は、自力で勝ち取らないとなりません。

電子画集は、まだ、始まったばかりの分野ですが、将来性は感じます。

アタシは、人の画集を作ってあげる程いい人じゃないもんで、これを読んだ人は自分で作るか、身近にいる、パソコンが得意な人に頼まなければならいと思います。

でもまあ、ワードで作っているんだし、作り方もついているのだから、出来ないことは無いでしょう。

アタシに作れたのだから、自分にも作れるはずだという信念をもち、画集作りにチャレンジして欲しいと思います。

電子本をきっかけに、アナタの作品が世に出ますように。

ちなみに、ＰＤＦファイルは、画像をパソコンで閲覧できるけど、印刷はできないというセキュリティーをかけることができます。

でありますから、電子画集には興味があるけど、印刷されたくないというアナタは、「プリント不許可」という設定でＰＤＦファイルを再保存しなおせば良いのです。

アタシぐらいのスキルがあると、その程度のセキュリティでは、本が開ければ、画像はパソコンから印刷できてしまいますけど。爆。

まあ、気休めに、保護するのは作家の意識としては悪くないかもしれません。画像を印刷できるように画集を作るかどうかは、個人的な考え方に起因するものなのです。

私は、著作権の事を甘く考えているのではないのです。きちんと理解した上で、私の作品の特徴とか、制作できる点数、今版権が売買できるのかどうかなどの実力を勘案して、まだそれほどでもないというのが理解できているので、無料で配布する選択をしているのです。

無名なんですから、まず、知名度を上げたいのです。

アタシは、絵が大量に描けるというのと、絵が物凄く上手い人でも、アタシのようなフォルムは作れないという、作品に物凄く特徴があるということも、念のため付け加えておきます。

絵が物凄く上手に描ける人でも、私の絵は描けないのです。しかも、絵に特徴があり、絵を見ただけで、あたしの絵だと、多くの人が認識できる絵でもあります。

何を意味しているのかといえば、何枚かを無料で露出すると、他の絵であっても、あたしの絵だと気づいてもらえる絵ということになります。

そういう作品だから、無料で公開しているということもあります。

アタシの狙いは、ホンモノを買っていただくという一点に絞られているということです。それ以外で、自分に出来ることは、全部無料にして人を集めているということです。

アナタだって、この道で生きようと思っているのですから、作品を見ただけで、「●●さんの作品だ」と解るような作品を作ってみたらどうでしょう？

そういう作品を公開しているのであれば、著作権を侵害されたときには、直ぐに手を打てるのです。

サインを大きく入れないと、誰の作品なのか全く解らないような、平凡な作品しか作れないような人が、画集を無料で公開するべきではありません。

著作権の侵害が起きたときに、対抗できないからです。

まず、それを、アナタにしか作れない作品にまで昇華させて、作品集を作られるステージに進まれるのが良いと思います。

それは、アナタの為でもあるのです。

厳しかったかなあ・・・・。ポリポリ。

第四章

本屋さんで扱ってもらうには？

＊＊＊　本屋さんに本を置きたい　＊＊＊

もし、アナタが本を出版するのであれば、それは、本屋さんに並ばなければ売れることはあり得ません。

人は本を、本屋さんで買うからです。

第一章で、「取次ぎ」と呼ばれる、本の流通会社に本を取り扱ってもらえれば、本屋に並べることができるという話をご紹介しました。

実際の所、どうなんっすかね？

アタシは、無料の本などを出して、アクセス数のテストを繰り返しながら、本の冊数を増やしていきました。

個人で出版する場合、本の取次ぎさんが何を見るのかといえば、この作家に、ホントウに書く力があるのかどうかという所だからです。

世の中には、一人で大量に本を書ける、化け物みたいな作家というのも存在しないわけではありません。

多くの本は、ごく僅かな、化け物みたいな人が中心になって、皆さんで儲けさせて頂いているというのが、実の所なのです。

申し出を受けた取次会社も、一冊、二冊では困ります。しかし、彼らにしてみたって、実際、どんな本が売れるのかは解らないのです。

業界全体に「数打てば、当たるかもしれない」みたいな、あやふやな部分も残されていて、とりあえず、金になりそうならばやってみる。的な話で動いているということです。

しかも、私が書いている、「バリ島関連」の特殊な本や、「俳句集」などには、一定の読者が必ずいるもので、大ヒットにはならなくても地味に売れ続けたりしている本も無いわけではないのです。

ウチのＨＰのアクセスよりも、もっと低い知名度で同人誌やら、その筋の専門的な出版を細々と続けている出版者だってこの世には存在しています。

全ての人は、本を読む権利がある。
アメリカ流に言うとそういうことになるワケです。

本の冊数がある程度あり、今後も出版をする予定で、出版者登録もされている、身元も明確になっているのであれば、彼らは扱いを断ることが出来ないはずという確信がありました。
そうでなければ、本の取次ぎとして存在している意味がないでしょう。

本屋とか、取次ぎ会社というのは、出版者と読者がいるから成り立っているワケで、2年間で十冊も本が出るのであれば、とりあえず扱ってみようみたいな展開になるとアタシは考えていたのです。

私が目指すべきは、「出版されている本の実績を作ること」にありました。

文は苦もなく書けますし、内容が面白いかとか、そういう話は別にしても、この程度の本であれば、あと何冊かは大丈夫という感じです。

しかも、私が扱っている電子本は、画集が中心です。文はたいして必要もなく、ページを稼ぐことが出来るという秘策もあるのです。

私は、自分で作る電子本の存在を、もっと多くの人に知ってもらいたいと思い、

写真を趣味にしている方向けに、電子写真集というのも出してみます。

こちらは、はじめから無料でスタートする予定でした。

うっひょー。出版から二週間で千人越えっすか？

私の電子本の知名度は、結構上がってきたのだということが実感できました。

ダウンロードページにアクセスした人の数ではなく、PDFファイルをダウンロードした人の数をカウントしているのです。

写真集や、旅行記を出したいという人がいかに多いのかを知らされる結果になりました。

写真だって、もう十年以上も前に、小型カメラで撮影したスナップ写真をスキャナーで取り込んで、貼り付けただけの本なのです。

データ盗難に遭って、今後の執筆活動を辞めようかと考えていたアタシは、「電子本を作り続けよう」と、気持ちを取り戻してゆきました。

こんなに沢山の人が、私の電子本を読んでくださるのだ。私が画家を目指しているということや、電子本を自分で作っていること、電子本を通して作品発表が、ずっと身近になった時代の到来を多くの方に伝えることができるのです。

有料配布だと、十冊程度しか売れないのに、無料だと千人に知っていただけるのであれば、広告宣伝費として、無料で配信するという選択の方が正しいとも思えてきます。

気を良くした私は、無料カレンダーというのを作ってみましたけど、二〇〇四年番は、一万ダウンロードを超えました。

無料配布物を、自分でプリントして使えるのが、便利だと気づくお客様が増えてきているのです。無料の集客力は実績で私を説得させてゆきました。

本の冊数が増えてくると、もう一つ別な問題が起きてきました。

それは、本の表紙や、CD版のラベルを作ったり、それを管理したりするという実務的な問題です。

今までは、一冊づつ別々に本の表紙とか、CDのラベルを作っていたのですが、十冊を超えると、それはもう、面倒でしかない作業となっていったのです。

どーせ売れないのだから、CDジャケット制作の時間は、全くムダになってしまうのです。

そしてとうとう、ある決断をしたのでした。

＊＊＊　決断　＊＊＊

「おじゃら・ねっとの本は、全て無料配布することになりました。」

私のブックショップには、このような文が掲載され、全ての本の無料配信をスタートしました。

といっても、当時有料で配布していたのは、この本と、最初の二冊だけだったんですけどね。

サーバーの容量の関係や、アクセスが集中すると、サーバーに負担がかかり、共同で借りている他の方にご迷惑がかかるので、とりあえず、順番に無料公開をスタートすることになりました。

有料なら十冊しか売れないし、一冊売れると二十冊盗まれるのに、無料だと千人に読んでもらえるということを理解できたからです。

今のところのアタシの決断は間違っていないと感じています。

何の為に画集を出すのかといえば、「私の絵の事を多くの人に知ってもらうため」だからです。

もし、作品に、ホントウに力があるのであれば、電子画集を見た人が、私の絵を「見たい」、あるいは「買いたい」と言ってくるはずなのです。画家なのだから、絵を売って稼げばよいのです。

もし、「本を見たけれど、実物を見たいとは思わないとか、その絵は全く要らない」という人ばかりなのであれば、私の作品に力がないからに他なりません。

もし作品を見たのにもかかわらず「私の絵を買いたい」と思ってくださる方がいないのであれば、それは、アタシの精進が足りず、作品がまだ、売れるレベルではないからであり、電子本のせいではないということです。

現実に、銅版画集のディープエッジでさえ７００人以上のダウンロードを確認していますし、私が無料配布している、版画の管理ノートというのも、何百人もの人が使ってくださっています。

版画の管理ノートをダウンロードする方は、版画を作る方です。ということは、絵を描く人が見に来てくれているということになります。

ＣＤ版は、一パターンだけ制作し、今まで出版した、全ての本を収録することにしました。

これにより、私は、一枚のＣＤジャケットと、一枚のＣＤラベルを作ればよいということになり、作業が物凄く楽になりました。

何よりも、精神的な負担が、ぐっと軽くなり、本はどんどんと書ける気がしてきます。

とりあえずは、駆け出しなのですから、小さいお金の話に執着しないで、自分の作品なり、主張を知ってもらうために本という形にする。

まず、このことが大切なのだと感じたのです。

そうして、出版から二年経った二〇〇五年、出版社さんの方から、この本を「オンデマンド出版で出版したい」というお申し出も頂きました。（申し出があり、その後、いくつかの調整の後、連絡がなくなりましたので、この本は、無料で配布することに決めました。）

本の内容が、出版者の方に気に入られたのです。

ということで、私は、途中で無料公開に方向転換したために、自力で本の流通経路に流す話は書けなくなってしまいました。

読んで下さった方には申し訳なく思います。ゴメンなさい。

物理的には出来なくはないが、カンタンには出来ない。

そう理解していただくのが良いと思います。

私にとって、本を既存の流通網に乗せる上で、最大の障害となったのが、「本の在庫を持たなければならない」ということでした。

本を流通経路に置いてもらうだけで、何百冊ものCD版を作らなければならないという現実があります。

今の本だけで、将来的もずっと展開するのであれば構わないのですが、私の場合、電子本を一年で三冊位出版してしまうのです。（一応、毎年3冊といのを目標に活動をしているのです）

CD版を一枚で展開するにしても、更新が追いつきません。

流通経路に乗せるためだけに、四ヶ月に一回、新しいCDを作り増すというのは、ナンだか地球環境を破壊するようで、全くムダなことに思えてきます。作ったCDが今以上に売れるとも思えませんでした。

無料で配信して、電子本の事を、本を出したい多くの人に知ってもらって感謝される方が、インターネットらしいアプローチだという気さえしてきたのです。

この前、テレビで、自費出版からスタートした作家さんの番組を見ました。

彼の本は、もともとティーンエージャー向けに書かれていたこともあり、彼は、毎日本を抱えて、渋谷の街頭で、自分で売って回ったのだそうです。

本屋さんによっては、地元の作家さんなどであれば、直接店頭に置いて売ってくれたりもします。彼の本は、渋谷の書店が置いてくれたことにより、大ブレイクしたのだそうです。（というよりは、もともとがメルマガで十万人ものアクセスがある実績のある文だったのよ。）

自費出版からスタートした作家さんは、現在では自分で出版者を立ち上げ、今はもう何冊もシリーズで本を出版し、合計で二百七十万部も売ったらしいです。自前でやると、取り分は、百パーセント自分の所に入るから儲かるぜ。

彼の場合も、スタート当初は日本独自の、本の流通システムという壁が大きく立ちはだかったとインタヴューに応えていました。

でも、彼は諦めなかったのです。

現在では、冊数が増えてきて、今後の予定や、ネットでのアクセス数などの、売れる見込みが、取次ぎ業者さんにも理解できたので、やっと取り次いでもらえるようになったというようなことなのでしょう。

「自力で何冊も出版できる文才がある」ここがキーになります。

アナタが、何冊も自力で本を作れるのかどうか？

アータねぇ、本を出したいなんて、日記程度しか書いたことのない人が、ぼんやりとつぶやいているだけではね、何冊も書いたりできないということなのよ。

それでも、ホントウに才能がある人は、もう書き始めているはずなのです。

アタシだって、誰に頼まれたわけでもないが、たいして内容のない話を、随分と書いてしまいました。

中には、電子本にした作品もあるし、ＷＥＢの読み物としてコンテンツも大量に作っています。

今では、いくらでも書けるという気持ちすらあります。

ホームページを作っている人を例に挙げればよいのです。

ホームページなど、誰にでも作れるものですが、普通程度の文章力では、内容の更新というのが継続出来ないのです。

内容の更新が出来ている人というのは、「主張したい何か」が、あらかじめある人に限られます。

それは、自分の収集した絵の作品集であったり、てぬぐいのギャラリーであったり、自分の絵のギャラリーであったり、花の写真館だったり、自作の詩や小説だったりします。

コンテンツは人それぞれであるが、発信し続けている人には「発信したいことがあって、ＨＰをスタートさせた人である」という共通点があるのです。

「ＨＰをスタートすることが目的」の人は、結局途中で息切れしてしまい、ＨＰは放置したままとか、中断とかいうのが普通の人なのです。

本作りも同じです。

「伝えたい何か」があって、「それを知りたい人」が一人でもいるのであれば、アナタは本を作る価値があるかもしれません。

ワードとアクロバットで作れば、お金はほとんどかからないのです。

一冊から作れるのです。

本という形になることで、探している人は勝手にやってきます。もっと良い本であれば、出版社も向こうからやってきます。

アタシのお友達の万君も、メルマガで文を発信していましたが、出版社から「本にしてみないか？」という話が来たのだそうです。

アタシの場合も含めて、ある程度読める、まとまった「文」が最初に存在したというのが「出版社」からスカウトされるきっかけになったのです。

作家を目指していてこれから本を書きたい？

まだ一文字も書いていない人の言うセリフとは思えないぜ。

ということでね、これから本を出そうとする人は、まず、HP作りからスタートしたらどうっすかね？

二-三年も続けて、自分の文にアクセスが十万人も来るのであれば、文才があるかもしれませんからね、今度は、電子本にまとめてみます。

そうして、それを出版社さんに持ち込んだり、もっと沢山の人に読んでいただけるように工夫と努力を続けてみましょう。

もし、ホントウに内容が優れていれば、（本にする価値があれば）出版の話は、出版社さんから来ます。

たいした内容じゃないけど、どうしても紙の本にしたいアナタの場合でも、PDF版として本の体裁が整っていれば、出費は最小限でオンデマンド出版にこぎつけられます。

オンデマンド出版にも、イロイロな形態があるのです。

本屋さんや、出版社さんは、本屋で本を販売しないと儲からない構造になっているのです。

ですから、取次ぎ会社で本を流通させてくれるオンデマンドの出版形態というのも、これから成長してゆくんじゃないかと思います。

在庫をそんなに抱えずに、今までよりも効率良く、本の出版が出来る時代が来たなと思えます。

沢山ある出版形態の中から、アナタは、懐と相談しながら、自分の金を使いすぎないで進んでゆくべきなのです。

アタシはね、「いい絵はきっと飾られる」と信じて絵を描いています。

本だって同じです。

「イイ本はきっと読まれる」

もし、アナタの文が、ホントウに優れているのであれば、目に触れる形で、情報をまとめて発信する能力があれば、その文は、必ず世に出ます。

もし、それで世に出ないのなら、アナタの文が悪いのです。精進が足りないのです。

誰でもが本を出すなんて間違っています。
才能がある人の文だけが本になるのです。

でも、どんな本だって、最初の一文字からスタートするのです。

はじめから、シロウトが、文で儲けようというのが間違っているのです。

本の形になったら、オンデマンドでも、電子本でもいいので、沢山の人に読んでもらいましょう。

沢山の人が読んで下さった実績というのは、アナタに勇気を与えてくれるし、その数字は出版社さんも動かします。

一文字一文字、コツコツと積み上げて、どうか、出版の夢を実現させてください。

私のこの文が、アナタの出版の参考になれば幸いです。

最後まで読んでくださって、ありがとうございました。

第五章（追記）

新しいISBNの話

＊＊＊　ＩＳＢＮコード体系の変更　＊＊＊

２００７年に、現在の十桁から、十三桁に変更になることが決定しました。

詳しいことは、「日本出版インフラセンター」ＪＰＯさんという所や、日本図書コード管理センターのＨＰにアクセスして、概要、チェックしてみてください。

今回のＩＳＢＮの仕様変更に伴い、いくつかの構造的な変更も伴っています。

アタシ的な理解だと、自前出版の作家さんに、より、付加しやすくなったと考えているのです。

その辺りのこと、追記しておこうと思います。

まず、十桁から、十三桁に以降になると、どんなことが起きるかということです。

現在ある本に関しては、再販時に、ＩＳＢＮコードを、変更して表記しなければならないという義務が付加されます。

何万冊も本を出版している会社さんには、大変なコストだと思います。

自前出版に、どう取り入れてゆくのかを、アタシも考えました。

私の場合、本はもう、十九冊程度出版しています。

新しいＩＳＢＮコードは、現在のコードを利用して自分でも作れますので、まず、今もっているコードを十三桁に計算しなおします。

そんでもって、一覧を作りました。

その後、これから出版する本に関しては、ＩＳＢＮコードを、十桁と、十三桁の併記にすることにしました。

こんな感じです。

おじゃら.ねっと www.ojara.net
mail:rica@ojara.net

-2007 ISBN4-901941-19-4
2007- ISBN978-4-901941-19-8

多少見栄えが悪いですけど、折角国際標準のコードに変更になるのですから、便乗して、国際図書にバージョンアップしちゃいましょう。

また、今までは、この、表紙や裏表紙などのＩＳＢＮ表記は、ＯＣＲで読み取れる、専用のフォントを利用しなければなりませんでした。

今回の改訂では、ＯＣＲ-Ｂフォントを利用しなくて良いという改善がなされました。

何を意味しているかといえば、もし、アナタが、自前出版のＣＤジャケットを自分で作ったとします。

今までは、ＯＣＲ-Ｂフォントを使って、ＩＳＢＮコードを付加しなければならない。

という話でしたが、「十一級以上の目視できる文字なら可」になります。ワードなんかの文字でも構わないというように変更になりました。

文字が読めれば、どんなフォントでも構わないということなのです。この改善だけでも、自前出版の人は、ＩＳＢＮを自分の書籍に付加できるチャンスが広がったとアタシは考えています。

機械読み取り用には、書籍ＪＡＮコードのバーコードを付加するのを標準とする。

という風に、書籍ＪＡＮコードに加盟しなくてはならないような説明になってますけど、自前出版は、書店流通はさせませんから、書籍ＪＡＮコードは付加しないで進めましょう。

いつか、書店デビューを自前でやる日が来たときに考えればよいことなのです。

電子本は、電子の世界。

電子の本屋さんで流通させるのであれば、一般流通用の書籍ＪＡＮコードは絵に描いた餅になります。

それでも、ＩＳＢＮコードを付加するというのには意義があります。

これをつけ、本として出版・登録すれば、アナタも国際作家ということなのです。しかも、出版者でもあります。スゲー。

ですからね、よーく考えて、頑張ってＩＳＢＮの取得を目指しましょう。

次の改定部分は、価格です。

今は、１００個 18000 円なんですけど、それが、１冊５００円になるということです。

あなたね、１冊っていってもね、ＩＳＢＮは、本ごとに一冊、１個つけるわけですからね。

出版した何十万部に対して、５００円づつ払うというのではないのです。

一冊につき、５００円で登録できて、国際図書として、世界に作家デビューできるのであれば、悪くない投資だと思います。

次に、図書コードを付加できる条件についても、範囲が変更になっています。

詳しくは、図書コードセンターのＨＰを見てください。

一応、引用文（赤文字）も入れておきます。

ご参考になさってください。

これで、ネット上の小説なんかにも、フィジカルな作品であれば、ＩＳＢＮをつけられるようになります。

ＨＰで小説を発信していても、本を出版しているという認定が受けられるということであります。

Web上のデジタルコンテンツに対するISBN付与の基準

2005年5月
日本図書コード管理センター

2004年のISBN年次総会の決定を受け、当センターでは日本の実情に合わせ、Web上のデジタルコンテンツに対するISBN付与の基準を下記のとおり決定した。

記

特定の表題を持つ著作物で下記の諸条件を充たすものは、フィジカルな形態を持たないWeb上のデジタルコンテンツであっても、ISBNを識別記号として使用することができる。

以下に記載しない事項については従来のISBN運用規定に従う。

必須条件

A［付与の対象］

（1）国際基準でISBNの対象外とされたものでないこと。

国際的に該当しないものとして指定されたものは以下の通りである。・オンラインデータベース等、恒常的に更新され、更新データへのアクセスが常時可能な電子出版物・ウェブサイト・販売促進もしくは広告物・電子掲示板・Eメール、その他電子通信・検索エンジン・ゲーム・私的文書

（個人の履歴書、自己紹介文等）・スケジューラー・日記・ブログ

(2) 雑誌でないこと。

Ｗｅｂマガジンを含む雑誌（定期刊行物）類はＩＳＢＮの対象外とする。

すでに発行された（紙媒体）雑誌の表題または目次から記事を検索し、ダウンロードまたは閲覧するようなものは「雑誌」に分類する。

また１個のタイトルの中に１個または複数のコンテンツが存在し、定期的に内容の変更が行われる（連載）コンテンツを含むものは雑誌として扱う。

Ｂ［出版者の義務］

(1) ＩＳＢＮを記載すること

ＩＳＢＮは原則としてタイトルページまたはトップページに目視可能な大きさで表示する。

記載方法はＩＳＢＮ本体のみ必須とし、分類・価格は必要があれば、出版者の判断によって記載するか否かを決めてよい。

なお、すでに印刷物として発行されたものを画像などでＷｅｂに取り込む場合、ファイル特定への混乱を避けるため、奥付のＩＳＢＮは消去する。

(2) 責任の所在を明記し、変更があれば連絡すること

出版者の責任を明確にし、無責任な出版を抑止するため、住所・電話・メールアドレスなど当センターや読

者などが連絡できるものの記載しなければならない。また上記の事項に変更のあった時は遅滞なくセンターに連絡しなければならない。

(3) 書名記号を付与し、管理すること

書名記号は出版者のみが付与の権限を持つ。出版者は付与した書名記号を管理する責任を負う。

運　用（主要なものの例示）

A）ファイルフォーマットの異なるものは発行形態の変更とみなして、フォーマットごとに別個のISBNを使用する。（国際合意事項）

ファイルフォーマットの分類は、出版者が十分管理できる範囲でそれぞれが決定することができる。

B）ファイルフォーマットのヴァージョン（たとえばマイクロソフトワード98、2000、XP、2003）は版数（エディション）とみなさない。

出版者が必要とするときは出版者の責任において枝番で管理する。

C）すでに印刷物として発行されたものはそれぞれの巻数ごとに1個のISBNを使用することを原則とする。ただし必要に応じてこれを任意に分割し、あるいは合本することもできる（単行本5冊が文庫化で8冊となるようなケース或いはその逆のケースに準ずる）。

D）雑誌などに掲載された記事・論文などは、独立させて表題を付し、ＩＳＢＮの対象とすることができる。この場合雑誌名を表題にしてはならない。雑誌名を表題とする場合は「雑誌」として扱いＩＳＢＮの対象外とする。（クレジットとして雑誌名を記載することはかまわない。）　上記に記載のない事項については、そのつどセンターまで照会願いたい。

自前出版の作家さんがチェックするべきところは、自分のオンライン作品が、もう、完成していて、この後、改定しないかどうかです。

A［付与の対象］（1）の説明

HP上のコンテンツというのは、書き換えがカンタンですよね。ウエブサイトには、ISBNは付加できません。

htmlデータであっても、圧縮してダウンロードさせれば、ウエブサイトではなくなりますからね。

ま、そんな工夫をすれば、PDF化しない状態でも、書籍の範囲になり、ISBNコードを付加できるという理解でいいと思います。

(2) 雑誌でないこと。

月次など、定期的に刊行しているコンテンツは、雑誌扱いにしろと書いてありますね。

連載小説なんかは、雑誌の方の登録ってことになっちゃいますよね。雑誌のコードって別なんっすよね。二個取るの、個人では管理大変なんで、取得は、ISBN一本で絞ります。

ですから、最初は、webで連載し、完成したら、（ほとんど内容入れ替えないのが普通ですから）PDF化、もしくは、zipなどで圧縮して、データを固

定化し、電子本として登録するという流れにすれば、雑誌ではなく、完成本として、本が自然に増えてゆくということになります。

ＷＥＢの作家さんたち、元気ですから。

既に、公開されている作品を沢山お持ちの方も知ってます。

ＨＰが持てる方は、電子本を作るのは、そんなに難しくないです。

是非、ワンランク上にチャレンジして、作品を本として登録してあげましょう。

Ｂ［出版者の義務］(1) ＩＳＢＮを記載すること

ＩＳＢＮコードは、今までは、奥付けにも、表記することになっていましたけど、今後は、奥付のコードは、表示しなくてもヨイという変更になっています。

ささやかな話ですけど、手間的には、物凄く、作業が削減されるんですよね。

あたしも、早速奥付から、ＩＳＢＮコードを削除しちゃいました。

今は、裏表紙だけにつけています。

(2) 責任の所在を明記し、変更があれば連絡すること

まあ、当たり前の話ですけどね。
本にするってことは、出版物に責任を持つってことっすからね。

オンラインの作家さんたちは、本名でやってる人少ないかもしれないですよね。
その辺、よーく考えて、図書コードの付加をするかしないか、考えて下さい。

エロエロ本とかって、ちょっと考えちゃいますけどね。

作家さんの場合、ペンネームというのもあるみたいですけどね。
出版者になる場合には、本名でってことなんでしょう。その辺、受け入れられれば、ＩＳＢＮを付加するし、別に受け入れられなければ、今のままでも構わないのです。
発信したいものを、自分の好きなスタイルで発信する。
そこが大切なのです。

本になるのかどうかというのは、別な話なんです。
作品が優れていれば、出版社が勝手にやってきます。
それでも、条件が合わなければ、今のままで行こう。
自分の作品なんですから、自分が主導権を握らなければなりません。

その辺、勘違いしないで、進めてゆくのがポイントだと思います。

今回の改訂で、気になったのは、そんなところです。

最初の何冊かは、とりあえず、ＰＤＦ化して、ネット配信というのにチャレンジしてみてはいかがでしょうか？

図書コードは、２００ページモノ、５冊分の小説が完成したら、導入する。

そういう気持ちで構わないと思います。

ただね、今の段階では、その存在や意義、個人でも取得できること、付加の費用が安価なことなどを、知っていただくことが大切なんです。

アナタが、図書コードセンターのお堅い文章を正しく理解できるかどうかは、アタシには解らないですけど、これを付加すると、自分の本の存在を、多くの人に知ってもらえるチャンスが増えるということです。

文章を発表するというのは、その文に責任を持つということです。

自分の著作物を守るためにも、是非、導入のスタディをして頂きたいと考えています。

第六章

オンデマンド出版の問題点

＊＊＊　オンデマンド出版の問題点　＊＊＊

この度、紙の本で、この、電子本自前出版してみませんか?を、オンデマンド出版してみないかという話を、とある出版社さんから頂きました。

自分で出版する本を、出版社から出版するというのは、おかしな話ですよね。

アタシにしてみれば、2年も前に書いた本だし、無料で公開していて、三千三百人がダウンロードしたという実績もあるし、この先、金になる話でもなかったんで、一旦はお引き受けしました。

書店に著作物が並べば、それだけで有名になるってことだってあるわけですからね。
アタシのイラストを表紙に使ってくれるという話でしたしね。

細かい契約条件の話などは、先方にもご迷惑がかかるので、ここには明記しませんけど、私には、どうしてもひっかかる部分が一つありました。

それは、出版部数の判断をどうするのかという部分です。

この手の本の場合、最近では、原稿料も支払われないのが普通らしいです。
印税十パーセント。（相場らしくて、個々に違うこともあるみたいっす。）

これが、作家収入の全てになるのです。

従来の出版方法では、奥付に出版の回数というのが明記されています。

初版、三版、六版などのように、刷り増されると、最終時に刷り増した時期などが明確に確定できて、そこから、作家が受け取るべき印税が、正しく支払われているのかを、公然とチェックできる仕組みが整っていたのです。

今回お引き受けしたオンデマンド出版は、小ロットで作成し、売れ具合により何度も作り増すという方法を取ります。

それは、書店や出版社の経営を効率化させる、優れたシステムなのです。

作家にとってはどうなんだろう？
出版社は、発行部数を明確にするために、奥付もしくは、最終ページなどに、エディションを自動採番する機能を付加しなくてはなりません。

仕組み的には、カンタンにできる話だとアタシは思っています。デジタル印刷なんですから、そんなに難しいプログラムじゃないはずなんです。

出版社がやるかやらないか。

誠意の問題だと思います。

それは、原稿料も支払われない作家への、最低限のマナーだと思います。

私は、一旦はこの本を完成させ、入稿しました。

その後、先方からは、「順調に進んでいる」というメールを一度頂いたきりで、全く連絡が入らなくなりました。

こちらも、一度、ダメになったらダメになったで、連絡を下さいというメールをお送りしましたが、1ヶ月経過しても、お返事も頂けない状態です。

誠意の無い先さんとお付き合いする必要もありません。

もともと、無料で配信していた本ですから、オンデマンドなどせず、続編も併せて、ネット再配布することに決めました。

ネットで文章を書いている方で、これから本を出版したいと思っている人の夢が、出版社の食い物になっているのです。

約束した十パーセントの印税くらい、キッチリ請求できる、もし、不払いがあれば裁判に及べる。

オンデマンド出版で、自費出版でない場合は、そういう出版物でなければなりません。

「本を無料で出せるから、その辺のことは曖昧なままでいい。

とりあえず、出版社の言いなりで、まず本を出そう。」

それはそれで悪いことではありません。

私だって、そうやって、成り上がることもできたのかもしれません。

それがきっかけで、他の仕事が来たり、出版社への次の本の売り込みが容易になったりもするかもしれないからです。

あくまでも、作家本人が決める範囲です。

アタシは、自分で本を作る本、「自前出版してみませんか?」で、儲ける必要は無いのです。

あくまでも、本業の絵で勝負したい。

だから、本にエディションなんか、つけてもらわなくても構わないんですけどね、これから作家になろうとしている方は、それでは困るでしょう。

アタシのオンデマンド出版は、自分で全てを作った最初の例になると、当時出版社さんは話されていました。

ですからね、そんなに大切な本なのであれば、今後、本を出版される方の、雛型になってしまいます。

これから、執筆の世界で生きてゆこうという人の権利が守れる契約をしなくてはならないと考えたのです。

オンデマンド化されることにより、アタシが無料で公開していた時よりも、（有料ですから）読んでくださる方が減ってしまうかもしれませんよね。

私には十パーセントしか入らないのに、その数字も信用できないとなれば、不安になりますよね。

僅かなお金のために、読者様が制限されてしまうより、無料公開で一万人に感謝されるほうが、広告宣伝としてはいーような気もします。

先方は、アタシの電子本を読み、金になると思って、出版をもちかけてきたのです。

私にしてみれば、出版物が何冊刷られたのかも解らないし、（冊数に関する表記がないと、法的に戦えないのに、）著作権を放棄するということになるのです。

どちらがヨカッタのかは、まだ解りません。

こんな本出してると、出版社から、イラストの仕事が取れないという、別な問題もあるんですけどね。

それは、私が決めた道です。

一生を賭けて、絵を描く。

だから、本など、無料で公開しても構わないのです。文章で収益を上げようと考えている人とは違うということです。

それでも、私の文で、儲けようとしている人がいるわけですからね、自分の著作物の最低限の、権利を主張するのは、作家として当然だとアタシは考えています。

もし、この本をお読みになり、多少なりともお金を支払う価値があると思った方は、投げ銭お願いします。

もしくは、絵を一枚買ってください。

絵が一枚売れれば、そのお金で、また絵の具が買えて、絵を描き続けることができるのです。

目標数まであと七千枚。

頑張って、描き続けるには収益を得なければなりません。画家というのは、稼げるようになるまでに、時間のかかる職業なのです。

アルバイトに出ると、絵を描く時間が減ってしまいます。できれば、絵から離れない場所で、どんなに安くても、イラストなどの仕事を引き受けて、力をつけて行こうという気持ちです。

皆さん、応援よろしくお願いします。

イラストや、挿絵の仕事もありましたら、是非チャレンジしたいです。

ご予算お知らせください。

どうぞ、よろしくお願いします。

＊＊＊　御礼　＊＊＊

最後まで読んでくださってありがとうございました。

オンデマンド化は、結局実現しませんでした。

自分の未熟さなのか、世の中が病んでいるのかは解りません。

しかし、そのお話をきっかけに、私は、この本の続編を完成されることができ、また、何千人もの方に読んで頂くことができるのです。

文章を書く者に取って、沢山の人に読んでいただける。

それが、最大の喜びだと私は信じています。

本の出版というのは、ゴールであってはいけません。

出版することにより、著作者の意思や主張、熱い思いを読者（知りたい方）に伝えるという作業の一つにすぎません。

そこのところ、間違えないで、本を作ってゆきましょう。

良い文を書き続ければ、それはきっと、どこかで話題になり、今度は紙の本になる日が来るでしょう。

最初の本を作るときに、本作りを励ましてくださったTさんには、今回、オンデマンド出版の話が来たときに、真っ先にご連絡を差し上げました。（だめになったメールも書かないとなあ）

大変喜んでくださいました。私は幸せものだと感じました。

この場で、もう一人、お礼を申し上げたい方がいらっしゃいます。

それは、私が電子本のデータを置いているサーバーの「シーサイドネット」http://www.cside.jp/さんです。

電子本の盗難に遭い、被害に気づいたときに、真っ先に知りたかったのは、アクセスログの詳細を手に入れるということでした。

それが解れば、どのパソコンからデータがダウンロードされたのかという具体的な数やパソコンのIPを追跡できるのです。

残念ながら、当時は、そういうリクエストに対応する仕組みがありませんでしたので、私が知りたい日のログは入手することができませんでした。

その後、シーサイドネットさんはデータの持ち方などを改善し、日別のアクセスログの詳細を閲覧できるようにしてくださったのです。

私は、とてもビックリしました。物凄くお金がかかる改善だからです。

もしかしたら、私以外からも、ログの提示に関するリクエストがあったのかもしれません。

どちらにしても、自力でデータ配信を行うときに、詳細ログの取れるサーバーをレンタルしていれば、盗む側への脅しにはなります。

誰が盗んだのか、いつきたのかなどが、全て解ってしまうのです。

そういう制度が整ったことをHP上でガイドして、「読みたい方は買ってください、盗難を突き止めたら訴えます」というふうに書けば、ほとんどの方は、その程度の額で大騒ぎされたくありませんから、ネット配布であっても、本をお求めいただけるんじゃないかと思っています。

ブロードバンド時代ですから、買った方がメールなどで、本のデータを転送したりしたら、盗難は発覚することはありません。

良い本は、きっと、そうやって複製され、沢山の人に読まれる宿命とセットで生まれてくるのです。古本を古本屋が売るのをとめられないのと同じです。

でも、自分で出来る限りのセキュリティーをかけ、何かが起きたときに、（悪質な場合には）訴訟も辞さないという、確固たる覚悟で出版をするのは大切です。

そういう姿勢こそが、本を読みたい方を、本を買う方向に向かわせるし、出版に関わっている方を守ってゆくのです。

アクセスログの分析には、エクセルなどの高度な知識も必要になりますが、私は、レンタルサーバーさんが、リクエストに応えて下さったことに、大変感謝をしています。

今後、有料配布をスタートしたときには、確実に、ログ分析ができるという一点が、サーバーからの直接盗難を防ぐのに役立ってくれると信じています。

これから、自前でご自分の電子本をネット配信する予定の方は、是非ご参考にしていただければと思います。

多くの方の出版の夢が現実のものとなりますように。

おじゃら　りか

あとりえおじゃらの本

****

自分で出版する本

データ盗難をどう考えるのか？オンデマンド出版の
問題点、ＩＳＢＮ改定に伴う自前出版への導入
（ＣＤ版　七百円
ダウンロード版フリー）

二〇〇五年　七月十二日発行
二〇〇八年　六月　タイトル改定

絵と文　おじゃら　りか
発行者　小山田　理花
発行所　あとりえ　おじゃら
〒一二〇-〇〇三四
東京都足立区千住三-五十八　おじゃら画廊
E-Mail:rica@ojara.net
http://www.ojara.net
ISBN 9784-901941-20-4

© おじゃら　りか

お気づきの個所がございましたら、
ご面倒様でも、Ｅ-ｍａｉｌにて
お知らせください。よろしくお願い致します。

あとりえおじゃらの本（広告）

****

自分で出版する本

パソコン（ワードとアクロバット）で作るカンタン・
激安e-Book
（CD版　七百円）

二〇〇三年　四月十日　初回発行
二〇〇五年　七月十二日改定
二〇〇八年　六月　タイトル改定

絵と文　おじゃら　りか
発行者　小山田　理花
発行所　あとりえ　おじゃら

〒一二〇-〇〇三四
東京都足立区千住三-五十八　おじゃら画廊
E-Mail:rica@ojara.net
http://www.ojara.net

©　おじゃら　りか

あとがき おじゃらの本

http://ojara.net

-2007 ISBN4-901941-20-8
2007- ISBN978-4-901941-20-4